

神戸の歴史

第 30 号

2025(令和 7)年 7 月

巻頭挨拶 神戸市文書館から神戸市歴史公文書館へ (1)

〈報告〉

- | | | |
|--------------------|------------|-----|
| (1) 神戸市歴史公文書館の整備 | 行財政局総務課文書館 | (3) |
| (2) 神戸市歴史公文書館 展示方針 | 行財政局総務課文書館 | (5) |

〈研究ノート〉

- | | | |
|----------------------------|--------|------|
| (1) 収蔵資料の利活用——資料にみる戦前神戸の風景 | 村上 しほり | (11) |
| (2) 絵葉書にみる昭和初期の六甲山観光 | 富沢 かよ子 | (17) |
| (3) 阪神大水害の写真記録 | 衣川 太一 | (31) |
| (4) 絵葉書にみる生田神社・湊川神社 | 福井 真奈美 | (41) |
| (5) 絵葉書にみる須磨の風景・史跡 | 中村 憲司 | (51) |
| (6) 絵葉書にみる有馬温泉の観光地化 | 近本 正子 | (59) |

神戸市文書館から神戸市歴史公文書館へ

神戸市文書館のあゆみ

神戸市文書館は、神戸市政 100 周年事業の一環として、『新修神戸市史』の編さんを進めるために、1989（平成元）年 6 月に開設された。

当館の旧館は、1938（昭和 13）年に池長孟氏が開設した、私設の池長美術館を活用した建築である。大正から昭和初期に活躍した小川安一郎氏の設計で、アール・デコ調のモダンなデザインが取り入れられた。

1951（昭和 26）年には、池長氏より神戸市へ美術館ごとコレクションの移譲を受け、市立神戸美術館（後に市立南蛮美術館と改称）が開設された。主な所蔵品は、国指定重要文化財である「聖フランシスコ・ザビエル像」、「泰西王侯騎馬図屏風」、「世界地図・四都図屏風」、「南蛮屏風」や、平賀源内筆「西洋婦人図」等の南蛮紅毛美術品であった。

1982（昭和 57）年の市立博物館開館に伴い、市立南蛮美術館は閉館し、美術品は博物館で収蔵されることとなった。新たに神戸市文書館として活用するにあたっては、耐震補強とともに窓サッシ等が改修されたものの、南蛮船のモチーフをはじめとした、スチール製の装飾金物や大理石張の柱などは現在も残り、2000（平成 12）年には神戸市景観形成重要建築物（現在は景観資源）の指定を受けている。

『新修神戸市史』の刊行は、1979（昭和 54）年度から準備が始まり、1989（平成元）年に初刊である「歴史編Ⅰ 自然・考古」が発行された。当初は、「歴史編」「産業経済編」「生活文化編」「行政編」の 4 編で構成し、各編 4 巻、全 16 巻の刊行予定だったが、1995（平成 7）年 1 月の阪神・淡路大震災の影響により、休止を余儀なくされた。

その後、「行政編」3 巻、「生活文化編」1 巻へと計画を見直し、2020（令和 2）年 3 月に「生活文化編」の発行をもって、全 12 巻の発行が完結した。

神戸市歴史公文書館開館に向けて

当館では、神戸市史編さんに伴い収集してきた、市域の貴重な歴史資料の閲覧業務や企画展の開催などを行ってきたが、歴史的公文書を集約し、保存・閲覧・調査研究などを行う「公文書館」機能は有していなかった。これまで本市は、大都市としての多くの先駆的な施策を行い、さらに、戦災、水害、阪神・淡路大震災などの困難な状況からも復興してきた。公文書や行政刊行物は、

こうした本市の歴史的事実を記録し、市政を跡づけ検証するための重要な資料であり、健全な民主主義を支える基本的インフラである。市民共有の知的資源として、現在および将来の市民に対して説明責任を果たすことができるよう、市民が主体的に利用できる仕組みを整備する必要がある。

そのため、2018（平成 30）年から、公文書館整備に向けた検討を開始し、2021（令和 3）年の市内の政策会議において、国登録有形文化財の旧岡方倶楽部（兵庫区本町 2 丁目）を活用して、公文書館を建設することが確定された。

2022（令和 4）年には「（仮称）神戸市歴史公文書館整備に向けた基本的考え方」を策定し、建築工事や収蔵資料の管理方法、常設展示などの検討を進めてきた。「神戸市歴史公文書館」は、旧岡方倶楽部の敷地内に、5 階建ての本館を新築し、1 階に閲覧室、2～5 階は収蔵庫を整備する。別館の旧岡方倶楽部は、文化財建造物としての補修を行った上で、展示室を設け、神戸市政のあゆみを伝える常設展示や、歴史公文書館と旧岡方倶楽部の建物を紹介する展示を行う。

今後は、収蔵資料を用いた企画展の開催や神戸市政史の編さん、さらに、資料管理システムを導入して、写真等のデジタルデータを閲覧・利用できる仕組みも構築する。

2026（令和 8）年 3 月に神戸市文書館は閉館し、同年 6 月に神戸市歴史公文書館が開館する。これまでの文書館による市史編さんのあゆみを引継ぎ、歴史公文書館として、神戸市政の歴史を繋いでいきたいと考えている。

令和 7 年 7 月

神戸市文書館

神戸市歴史公文書館の整備

行財政局総務課文書館

神戸市歴史公文書館は、歴史的に価値のある公文書や市史編纂のために神戸市文書館が収集してきた地域歴史資料等を適切に保存し、利用する施設として整備する。

(1) 施設概要

- ・国の登録有形文化財「旧岡方倶楽部」(兵庫区本町2丁目)の既存建物の改修と敷地内に新設棟の整備を行い、令和8(2026)年6月の開館を予定する。
- ・現在の神戸市文書館(中央区熊内町1丁目)は、保存資料とともに歴史公文書館へ機能を移転する。

■本館(新設棟)

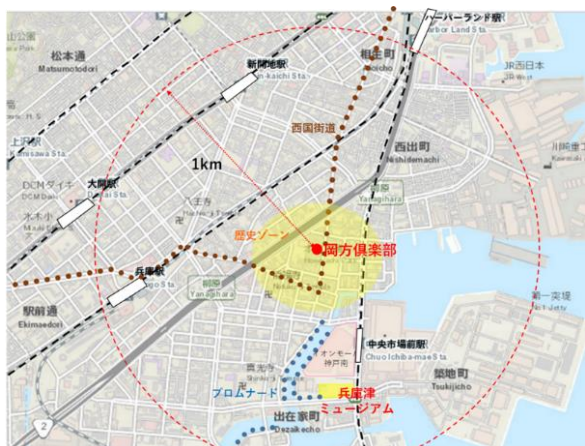
階数 : 地上5階建て
延床面積 約1,600㎡
主な機能: 書庫、閲覧室、事務室など

■別館(旧岡方倶楽部)

階数 : 地上3階建て
延床面積 約530㎡
主な機能: 展示室、書庫など



新設棟・閲覧室イメージ



完成予想図

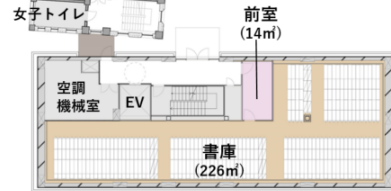
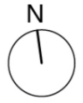
● 平面計画（１～３階）

（１階）

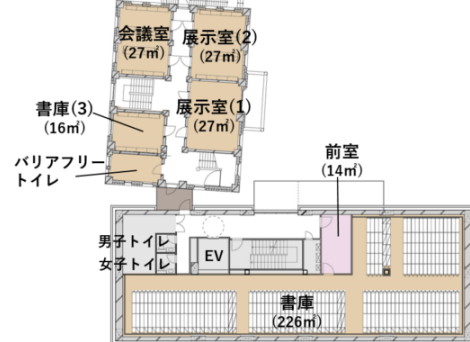


（３階）

(R6.10)



（２階）



（２）歴史公文書館の事業

■歴史的公文書等の保存

明治期、大正期に作成・取得した貴重な公文書や阪神・淡路大震災に関連する公文書などの歴史的公文書等を永久に保存していくため、適切な保存環境の維持による劣化への予防策に取り組み、資料の修復や撮影を行う。

■歴史的公文書等の整理、閲覧提供

歴史的公文書等を整理・デジタル化し、資料管理システム（デジタルアーカイブ）を構築することで、利用者の利便性を高める。

■歴史的公文書等に関する調査研究

歴史的公文書等に関する調査研究を行い、その成果を発信するとともに、レファレンスサービス（資料の利用に伴う調査相談対応）の向上につなげる。

■普及活動

市政史と神戸の歴史を伝える常設展示、企画展や講座の開催、ホームページからの情報発信等を通じて歴史公文書館の普及・広報活動に努める。

神戸市歴史公文書館 展示方針

行財政局総務課文書館

I 展示室の理念

(1) 経緯と位置付け

本市は、1889(明治 22)年の市制施行以来、数多くの先駆的施策や事業を行い、また、災害や戦災を乗り越え発展してきました。このたび、本市の歴史的事実の記録であり、市政を跡づけ検証するための重要な資料である歴史的公文書等の適切な保存・活用を進めることを目的とし、歴史公文書館を設置します。

2022(令和4)年度には「(仮称)神戸市歴史公文書館整備に向けた基本的考え方」を策定し、2024(令和6)年3月から新築・改修工事を進め、2025(令和7)年 10 月に完了、2026(令和8)年6月の開館を目指しています。

本市に住み、働き、学ぶ人びと、本市を訪れる多様な人びとの歴史的公文書等への認知を高め、神戸市の歴史について理解を深めるとともに、次代の文化創造やまちづくりにつなげるための普及啓発として、歴史公文書館内に展示室を整備します。

(2) 目的

歴史公文書館における展示は、市内外の多様な人びとに、次の2点を伝えることを目的とします。

① 神戸市の歴史や政策の成り立ちを伝える(展示室1・2)

歴史公文書館は、神戸市役所にとって歴史的に重要な公文書を保存し、歴史的・文化的資産として将来につなぐ機能を有します。歴史公文書館における展示は、1889(明治 22)年の市制施行によって成立した神戸市の歴史や成り立ち、神戸市政としての意思決定の過程について理解を深められる内容とする必要があります。

展示室1・2の「神戸市政のあゆみ」は、『新修神戸市史 行政編』(Ⅰ～Ⅲ、新修神戸市史編集委員会編、1995～2005 年)を参考にした展示内容とし、市制施行から2025(令和7)年までの神戸市政の歴史を伝えることが求められます。

② 公文書の意義・重要性和、保存して将来に残すことの意義・重要性を伝える(展示室3)

本市は、歴史公文書館の開館とともに、公文書管理条例の制定を予定しています。自治体の政治・行政は記録や文書に基づいて適切に行われる必要があり、またこれらが適正に検証・評価されるためにも、公文書が作成・保存されていることは不可欠です。公文書の重要性や、歴史的事実の記録として現在および将来の市民への説明責任を果たす歴史的公文書を保存し、将来に残すことの意義・重要性を伝える展示とすることが重要です。

展示室3の「神戸市歴史公文書館について」は、神戸市文書館(1989～2025 年、中央区熊内町)の市史編集事業を振り返り、歴史公文書館の開設経緯と概要や神戸市役所の公文書管理について紹介する展示内容とすることが求められます。あわせて、歴史公文書館の立地する国登録有形文化財・旧岡方倶楽部の概要についても紹介することとします。

2 展示計画

(1) 展示の基本方針

歴史公文書館の展示エリアは、別館2階の展示室1・2が一室あたり約 25 ㎡、3階の展示室3は約 120 ㎡のうち一部となります。限られた面積を有効に活用するために、展示レイアウトや展示方法の工夫が求められます。

例えば、展示室1・2では、グラフィックウォールの展示内容と展示ケース内の資料を一体に設計すること、展示室3では、可動式の展示パネルと展示ケースを用いる柔軟な配置の展開を検討します。

また、グラフィックウォールと展示ケース内キャプションの内容に加えて、デジタルサイネージやQRコード等を用いた充実した解説の作成によって、多様な人びとの理解・学びにつながる展示を目指します。

展示室3を会場とする企画展示は、所蔵品を活用したものと、他機関等からの借用資料を含むもの、二つの方向で展開することを検討します。

【展示エリアの展開例】

展示スペース	パターン1	パターン2	パターン3
展示室1 (約25㎡)	常設展示 (神戸市政のあゆみ1)	常設展示 (神戸市政のあゆみ1)	常設展示 (神戸市政のあゆみ1)
展示室2 (約25㎡)	常設展示 (神戸市政のあゆみ2)	常設展示 (神戸市政のあゆみ2)	常設展示 (神戸市政のあゆみ2)
展示室3 (約120㎡)	常設展示 (神戸市歴史公文書館) (旧岡方倶楽部)	企画展示(所蔵品を活用) 常設展示 (神戸市歴史公文書館) (旧岡方倶楽部)	企画展示(借用資料を含む)

(2) 主な対象

本市に住み、働き、学ぶ人びと、本市を訪れる多様な人びとを対象とします。

このたび、神戸市は初めて公文書館を設置することから、本市の歴史や成り立ちとともに、それを跡づける公文書や歴史的公文書等の意義・重要性をわかりやすく伝えることが重要です。

また、歴史公文書館が建設される立地を踏まえると、兵庫の歴史や魅力を学ぶ展示施設である兵庫県立兵庫津ミュージアムとあわせて、見学に訪問されることが見込まれます。こども・若者にも理解できる分かりやすい解説を付し、館の目的や役割について理解できる展示とすることも重要です。

本市や近隣地域に観光等で訪れた人への視点も欠かせません。そのうち、国外からの来館者にも配慮した展示の工夫として、多言語の展示解説も検討する必要があります。

(3) 展示構成

歴史公文書館の展示は、別館2階の展示室1・2(約 25 ㎡/室)と3階の展示室3(約 120 ㎡)からなり、神戸市の歴史文化と歴史公文書館について学びを深める内容とします。

① 展示室1・2「神戸市政のあゆみ」

別館1階から階段を上がった際に最初に目に入る一室を展示室1とします。

神戸市の歴史について、1889(明治 22)年の市制施行から現代に至るまでの神戸市政のあゆみを歴代市長の重要施策を軸にしてつなぎ、歴史的公文書や写真等を用いたグラフィックウォールで、わかりやすく解説することが求められます。

各室に3~4台の展示ケースを設置し、歴史的公文書等にキャプションを付した展示を検討し、資料から明らかになる神戸市の歴史的事実を、小中学生にも理解できる平易な文章で伝えるものとしします。

なお、収蔵する資料を用いた展示室の整備とは別に、各室にデジタルサイネージ1台ずつの設置とHPによるデジタル展示の構築を予定しています。

② 展示室3「神戸市歴史公文書館」「旧岡方倶楽部」

神戸市歴史公文書館の経緯や機能等と、別館にあたる国登録有形文化財・旧岡方倶楽部について、グラフィックと所蔵資料の解説を用いて、わかりやすく紹介します。

展示室3は定期的に企画展示室として使用するため、神戸の歴史や文化等に関する企画展や関連する講演会等を実施する際には、今回、常設展示として制作する内容から展示替えを行います。そのため、展示什器類をできるだけ可動式とし、柔軟に配置できる展開を検討します。

企画展示は、所蔵品を活用したものと、他機関等からの借用資料を含むもの、二つの方向で展開することを検討します。

また、展示室3の西側は、歴史的公文書の移管・整理作業時に使用することも想定します。

【参考：文書館の企画展示例】

生粋の神戸人間 池長孟の足跡—建物の記憶をたどって—

布引—景勝地から遊園地、テーマ型都市公園へ—

近代神戸の開かれた六甲山

神戸と難民たち

都市と戦争—新資料に見る防空と戦災—

幻の公会堂と神戸モダニズム—未公開設計図集と昭和初期 街の風景—

市史発行記念—近代神戸の産業経済史—

戦時下に起こった阪神大水害

近代神戸の風景—レファート写真コレクション—

兵庫運河のあゆみ—八尾家文書を中心に—

鹿島秀麿と明治の神戸

井上善右衛門家文書展

(4) 展示の資料及び手法

① 展示資料

神戸市歴史公文書館(神戸市文書館)の所蔵する資料を中心に、他機関(神戸市立中央図書館、神戸市立博物館等)の所蔵資料を借用して複製物を作成することも含めた展開を検討します。また、文書に限らず、写真、物品などの資料も活用した展示とします。

決定した文書だけではなく、それに至る意思決定過程の資料等もあわせて示すものとしします。また、個々の資料については、どのような経緯があって保有されているかの来歴を示した展示を行うものとしします。

② 展示手法

文字説明、デジタルコンテンツ、関連物品などにより、歴史的公文書等を多角的に展示、解説

します。

常設展示においては、資料の特性や展示のコンセプトを踏まえたグラフィックウォールの制作とケース展示を行います。展示に活用する歴史的公文書は、撮影・画像処理を行い、用紙に出力し、古色加工等を行って複製物を作製することによって、歴史的に重要な公文書の長期保存・アーカイブ化と展示制作を一体に進めるものとします。

3 施設計画

(1) 施設の構成

① 神戸市歴史公文書館の施設概要

所在地 神戸市兵庫区本町2丁目3-33

敷地面積 約 1,211 m²

歴史公文書館(本館) ※新築

・構造等:RC造一部S造5階建

・建築面積:約 352 m²／延床面積:約 1,596 m²

・主な機能:

1階 閲覧・開架スペース、事務室、会議室

2～5階 書庫

旧岡方倶楽部(別館) ※改修

・構造等:RC造3階建

・建築面積:約 187 m²／延床面積:約 537 m²

・主な機能:

1階 事務室、書庫

2階 展示室1・2

3階 展示室3

駐車場

・障害のある方などを対象とした駐車場1台分



② 神戸市歴史公文書館の平面計画

別館の展示室にかかる1～3階の平面計画と展示室の場所、室内を改修工事前に撮影した写真は、次の通りです。

なお、展示室へのアクセスとして、(ア)別館1階から階段を上がる動線と、(イ)本館のエレベーターで2階や3階へ上がり、渡り廊下で接続した別館に向かう動線の二通りを想定します。展示室に職員は常駐せず、質問がある場合には本館1階の閲覧室を訪れるものとします。

(2) 空調設備・照明機器

歴史公文書館別館は歴史的建造物のため、構造と面積等から改修の制約があり、十分とは言えない展示環境にあります。そのため、照度・温湿度の管理は難しいことを前提に、展示物や展示方法を検討することが求められます。

また、展示室は三室ともに無人(監視カメラの設置あり)で公開する予定です。セキュリティの面も実施設計内での検討を要します。

(3) 展示ケース

展示室1・2の展示資料は原本とする想定にないため、展示ケース7台の仕様はノンエアタイト式、高透過ガラスとします。

展示室3は企画展示を行う際に、原本資料の展示も想定するため、展示ケース6台の仕様は気密性の高いエアタイト式、高透過ガラスとします。また、室内レイアウトを適宜変更する計画につき、職員が動かすことのできる可動式展示ケースの選定が求められます。

4 整備スケジュール

2022(令和4)年12月	「(仮称)神戸市歴史公文書館整備に向けた基本的考え方」の策定
2022(令和4)年度	歴史公文書館実施設計
2024(令和6)年3月	(仮称)神戸市歴史公文書館新築他工事
2025(令和7)年3月	「神戸市歴史公文書館 展示方針」の策定
2025(令和7)年度	歴史公文書館展示室 実施設計業務
2025(令和7)年10月	工事完了予定
2025(令和7)年11月～	書架納品・設置工事予定
2025(令和8)年1～3月	歴史公文書館展示室 制作業務
2026(令和8)年6月	歴史公文書館 開館予定

参考 展示候補資料

2024(令和6)年度レプリカ作製

- ・「築港に関する経済調書」庶務課、明治39年【歴史的公文書】
- ・『神戸市民読本』神戸市役所編、大正14年【図書】
- ・「防空費追加予算原議」防衛局、昭和17年【歴史的公文書】
- ・「合併資料 淡河村」企画室、昭和32年【歴史的公文書】 他

収蔵資料の利活用——資料にみる戦前神戸の風景

村上 しほり

1 収蔵資料の概要と利活用

1989（平成元）年に市制百周年を記念して開設された神戸市文書館は、『新修神戸市史』の編さん過程において、神戸市域に関する歴史的・文化的な価値のある文書や資料類を収集してきた。2026 年度に開館する神戸市歴史公文書館は、文書館資料を引き継ぐことに加えて、新たに保存期間を満了して移管される歴史公文書の保存・利活用を担う公文書館として、多様な収蔵資料を整理・公開する施設を目指している。

歴史公文書館は、資料の目録と画像等のデータをインターネット上で見ることが出来る収蔵資料管理システムを構築し、資料の登録・公開を進めていく。目録の編成は、表1の通りである。同システムは各資料区分の目録の検索機能に加えて、デジタルアーカイブとしての機能も有し、インターネットを通じて資料を検索したり、閲覧したりする利活用の展開が期待される。

文書館が収蔵する資料のなかでも、懐かしい神戸の風景をわかりやすく伝える写真や絵葉書等の資料については、今後より多くの方々に利用いただけるよう整理・デジタル化を進めている。本号では、収蔵資料を用いて、六甲山、生田神社・湊川神社、須磨、有馬、そして阪神大洪水について紹介する。その背景として、本稿においては、昭和初期神戸市の観光行政のもと発行された絵葉書資料を手がかりに、戦前神戸の名所・名勝の見方を整理してみよう。

表1 歴史公文書館の目録編成

資料種別	資料区分
公文書	1A 特定歴史公文書
	1B 震災関連文書
	1C 役場文書
写真等	2A 市政写真
	2B 寄贈写真
	2C アーカイブ写真館
	2D 絵葉書
	2E 映像・音声
刊行物	3A 図書
	3B 市政刊行物
	3C 地図
	3D 視聴覚資料
歴史資料	4A 市史編さん資料
	4B 古文書
	4C 戦災資料

2 資料にみる戦前神戸の名所・名勝

2-1 名所・名勝とは

戦前に発行された絵葉書や地図などの印刷物には「〇〇名所」「〇〇名勝」というタイトルが多く見られる。「名所」とは、すぐれた景色や史跡、特有の風物などで有名な場所を意味する。「名勝」とは、文化財保護法では、「庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳その他名勝地で我が国にとって芸術上又は観賞上価値の高いもの」のうち、重要なものとされている¹⁾。

「神戸名所」と「神戸名勝」を題した絵葉書は、同時期に複数のシリーズで発行されていた。これを見ると、1950（昭和25）年に文化財保護法が施行される以前は、「名所」と「名勝」を厳密に使い分けてはいなかったようである。

ここでは、神戸を代表する「名所」「名勝」とうたわれた風景を見てみよう。昭和初期に神戸市役所は「神戸名所」「神戸名勝」を広める複数の絵葉書を発行した。

2-2 昭和初期神戸の観光

1930年代は日本の観光行政にとって躍進の時代であった。1927（昭和2）年に経済調査会から「国際観光の振興」に関する答申が出され、1930（昭和5）年に鉄道省に設置された国際観光局によって、外国人観光客を誘致する観光宣伝が始まった²⁾。

神戸市役所では、1931（昭和6）年9月に秘書課の事務分掌に「観光施設に関する事項」を定め、1934（昭和9）年度に観光課を設置し、観光開発の取り組みを積極的に進めた。当館には、昭和時代初期に神戸市観光係や観光課が「神戸名勝」という表現で紹介した複数の絵葉書を所蔵している（表2）。

収集したり、寄贈を受けたりした資料のため、発行された枚数から欠けがあるかもしれない。一見したところ同じかと思われる絵葉書も、並べて見比べてみると時点が異なることや、取り上げられた対象が異なることがわかる。

ここでは特に、「神戸名勝絵葉書」というタイトルで神戸市役所が発行した、4つのシリーズ（No. 103、105、104、214）に着目する（表3）。

表2 当館所蔵の「神戸名所」「神戸名勝」絵葉書

種類	シリーズ No.
神戸名所	1[神戸名所 彩色]、3「最も新らしき神戸名所絵葉書」、36[神戸名所遊覧記念]楠正堂、60[神戸名所]（※1枚のみ）、155「神戸名所菊水楼」神戸菊水楼、168[神戸名所]、182[神戸名所]、185[神戸名所]
神戸名勝	18[舞子・神戸名勝]、103「神戸名勝絵葉書」神戸市観光課（=4、283）、104「神戸名勝絵葉書」神戸市役所観光係（=213 ※観光課発行）、105「神戸名勝絵葉書」神戸市観光課（=7）、135[神戸名勝]、176[神戸名勝]、184[神戸名勝]、213「神戸名勝絵葉書」神戸市観光課、214「神戸名勝絵葉書」神戸市役所観光係、216[神戸名勝]、249[神戸名勝]、278[神戸名勝]、308[神戸名勝]

表3 神戸市役所の発行した「神戸名勝絵葉書」にみる風景

シリーズ No.	103（4枚）	105（8枚）	104（6枚）	214（6枚）
種別	木版画	日本画	写真、解説付	写真、解説付
六甲山	○	○	○	○
布引の滝	○	○	○	○
須磨	○	○	○	○
市街地風景	○		○	○
湊川神社			○	○
摩耶山		○	○	
神戸港		○		○
その他		○○○		

4つのシリーズを見比べると、紹介された風景に相違点があることがわかる。すべてに共通するのは、六甲山、布引の瀧（雄瀧、雌瀧）、須磨の海浜や須磨浦公園である。このほか、神戸を代表する市街地だった元町通と湊川新開地、湊川神社、摩耶山、神戸港も見られた。105の日本画では、

このほかに再度山と鷹取山、鶴越が描かれている。

2-3 写真で紹介する「神戸名勝」

【資料情報】「神戸名勝絵葉書」神戸市役所観光係、1931～1934年、6枚（No.104）

【タイトル/104】六甲山、摩耶山、布引雄瀧、神戸市街、湊川神社、須磨の浦公園

【資料情報】「神戸名勝絵葉書」神戸市役所観光係、1931～1933年、6枚（No.214）

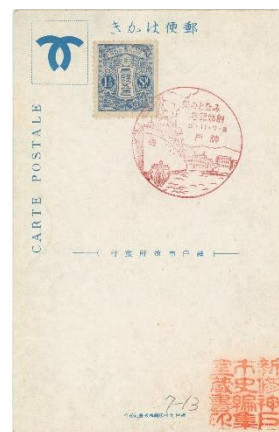
【タイトル/214】六甲山、布引雄瀧、神戸築港、湊川神社、湊川新開地、須磨海岸

104と214の表紙には「神戸名勝絵葉書 SOUVENIR OF KOBE -FAMOUS VIEW POST CARDS」と記され、さらに日英併記の解説が付されている。明らかに海外からの観光客の手に渡ることを意識したものと言える。

①発行時期の推定

発行者は「神戸市役所観光係」と記され、「秘書課観光係」が設置された1931（昭和6）年9月から観光課が成立する1934（昭和9）年の間に発行されたと推察される。214の絵葉書オモテに捺された記念印には「みなとの祭創始記念／8・11・7-8／神戸」と印字があることから、第1回みなとの祭りが開催された1933（昭和8）年11月に入手されたことがわかる。

2つの資料群に含まれる資料タイトルは、きわめて似ている。しかし、同じ対象を取り上げてもアングルの異なる写真を使用していること、214の写真がそれぞれに調色したプリントであることなどから、104、214の順に発行されたものではないかと思われる。



②写真と解説から読む神戸の風景

No.104の「六甲山」はスキー場の風景である。1910年代（明治末期）に外国人により山上でのスキーが始められ、大正末期には、六甲スキー倶楽部、神戸スキー倶楽部が結成された。当時はめずらしいレクリエーションだったのだろう。解説には、交通手段でもあるロープウェイとケーブルカーや、山上のキャンプ、スキー、スケートの理想郷、関西屈指のゴルフ場という魅力あふれるレクリエーションが紹介された。

「摩耶山」には摩耶山天上寺と、その眼下に神戸の市街地と築港風景がみとめられる。解説には「ケーブルカーによって容易に登り得られる眺望開豁」と記された。

「布引瀧」では雄瀧が写され、「雄瀧は二十丈、雌瀧は五丈」と、瀧の大きさが紹介された。日本



では明治時代の尺貫法で 1 尺=10/33m (=約 0.303030m) と定義された。また、1 丈=10 尺=約 3.03m のため、20 丈は 60.6m にあたる。また、No.104 では木々に垣間見える雄滝の美しさを見せていたが、No.214 では木々を避けたフレームからはっきりと雄瀧を見せるアングルが採られ、並べてみるとその印象はまるで異なる。

「神戸市街」は諏訪山から、手前に相樂園と諏訪山小学校、兵庫県庁と県公館、そして旧居留地や埠頭までの「海港神戸の中心地帯」を眼下に一望している。

2-4 日本画で描く「神戸名勝」

【資料情報】「神戸名勝絵葉書」神戸市観光課、1934～1936 年、8 枚 (No.105)

【タイトル】六甲山、布引雌瀧、須磨之浦公園、摩耶山、神戸港、再度山、鷹取山、鶴越

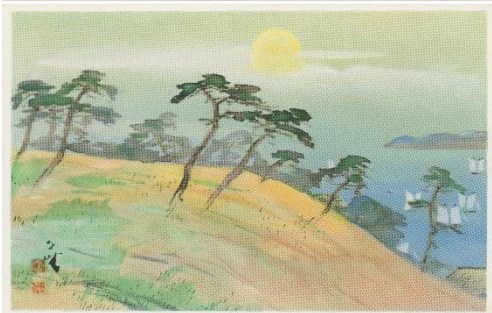
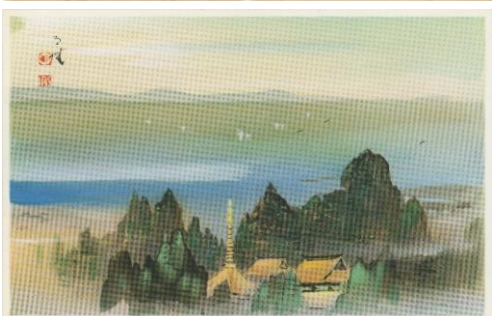
No.105 は、8 枚のうち「神戸港」を除く 7 枚が自然風景を描いている。日本画であることから昔ながらの風光明媚な風景や史跡を取り上げたのだろうか。一方で、絵葉書のタイトルには英語のタイトルも付記されており、海外からの観光客を意識して発行されたことも見てとれる。

①神戸に向けるまなざし

これらの絵葉書は 4 人の日本画家によって 2 枚ずつ描かれている。ここでは 2 人を紹介する。

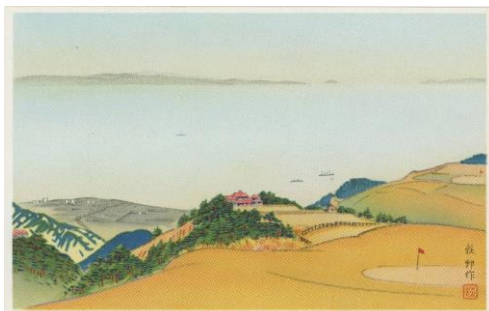
絵葉書の袋と「摩耶山」「須磨之浦公園」は、兵庫県日本画壇の中心人物として後進の指導にあたった森月城（もり・げつじょう、1888～1961 年）の作である。兵庫県加東郡社町（加東市）に生まれ、京都で竹内栖鳳に師事し、1914（大正 3）年に京都から須磨に移り住んで神戸絵画協会、神戸美術家協会の結成に参加した。亡くなられる直前の 1961 年には、「須磨の浦」と題して『月刊 神戸っ子』で次のように語っていた。

汐見台から見下すと海を一望できて夕暮れどきに、幾十そうもの帆船がちらばって見えて、須磨の浦の



素晴らしい風情に魅せられたものだ。とくに、須磨で一番いいのは月のある風景だと思う。「月と言えば、須磨」とあい言葉のようにいはれているが、私も須磨の浦の月に日本一と折紙をつけていい。³⁾

「六甲山」と「神戸港」は当時、京都市立絵画専門学校（現京都市立芸術大学）の助教授だった宇田萩邨（うだ・てきそん、1896～1980年）の作である。神戸にゆかりが深いわけではないが、著名な四条派の近代日本画家であった。六甲山にはゴルフ場と、1929（昭和4）年に宝塚ホテルの分館として開業した六甲山ホテルが描かれたのだろうか。また、神戸港には、1911（明治44）年に東洋汽船から大阪商船に売却されて神戸－基隆間の台湾航路や大連航路に就航した「あめりか丸」が中心に描かれている。



②袋の表紙と山麓電飾

袋の表紙には、錨山と市章山の黄色に輝く電飾と、緑の山々が描かれている。表紙に捺された記念印には「布引観光記念／神戸市観光課／11.8.4」と印字があり、1936（昭和11）年に入手されたことがわかる。

神戸市のランドマークである錨山と市章山は、本市にとって歴史的に重要な行事とともに成立した。錨山の由来は1903（明治36）年に明治天皇行幸の観艦式を記念して、小学生が錨型に並んで日の丸を振り、天皇を迎えたことにある⁴⁾。さらに、1907（明治40）年に神戸港の築港起工式記念を機に、「錨」と同年に生まれたばかりの「市章」のかたちに松が植栽された。1933（昭和8）年には第1回みなとの祭りを記念して仮設の電飾が施され、1967（昭和42）年の神戸港開港100周年をきっかけにして、夜間の電飾を恒常化した。

また、1989（平成元）年に市制100周年を記念して開催されたフェスピック神戸大会を機に堂徳山にも点灯をはじめた。「KOBE」「北前船（正面）」「北前船（側面）」の表示が変わる電飾もいまやお馴染みで、これらの山麓電飾は神戸のシンボルとなっている。

2-4 川西英『神戸百景』で彩る「神戸名勝」

【資料情報】「神戸名勝絵葉書」神戸市観光課、昭和初期、4枚（No.103）

【タイトル】背山眺望、布引ノ瀧、須磨海水浴、元町通

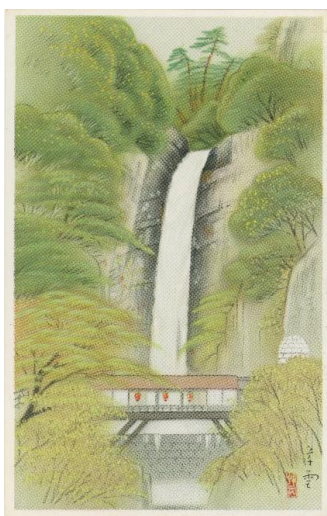
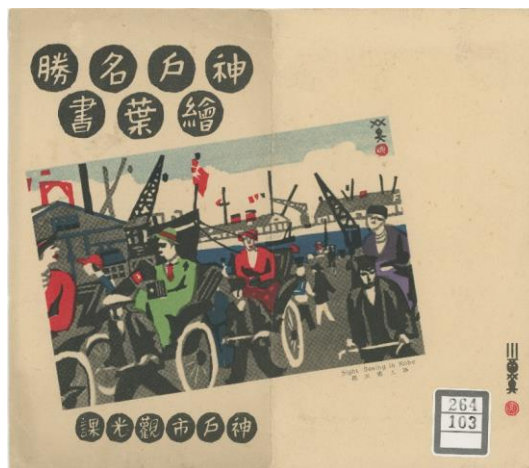
No.103は、川西英（かわにし・ひで、1894～1965年）が1933（昭和8）～1936（昭和11）年に制作した版画『神戸百景』の作品から選ばれた4枚である。

袋には1935（昭和10）年7月に制作された作品「観光団上陸（Sight-Seeing in Kobe）」が刷られ、神戸港から人力車に乗って市街地へ向かう洋装の男女が見られる。

「布引ノ瀧（布引雌瀧）」は布引雌瀧を観瀑橋越しに眺める風景と見られる。No.105の「布引雌瀧」でもほぼ同じ画角で描かれており、まさに、神戸を代表する「描きたい名勝」

だったと言えよう。その一方で、写真の絵葉書では雄瀧、絵画の絵葉書では観瀑橋越しの雌瀧と、対象が異なったことにも何か意味があるのかもしれない。

また、川西英の作品制作の時期からは、「背山眺望」は1935年1月、「布引ノ瀧」は1936（昭和11）年8月、「須磨海水浴」は1936年9月、「元町通（元町夜雨）」は1936年8月。ここから、絵葉書の発行時点は1936年9月以降であることがわかる。



注

- 1) 文化庁 HP <https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/meishou/>
- 2) 村上 しほり『神戸 闇市からの復興—占領下にせめぎあう都市空間』慶應義塾大学出版会、2018年
- 3) 森月城「須磨の浦」『月刊 神戸っ子』1961年7月号
- 4) 神戸市 HP <https://www.city.kobe.lg.jp/a17526/kanko/leisure/landmark/denshoku/shisyo.html>

絵葉書にみる昭和初期の六甲山観光

富沢 かよ子

はじめに

神戸市の背山である六甲山系は、市民に恩恵を与える一方、荒廃により市域に度重なる災害をもたらしてきた。明治期からは大規模な治山・治水事業がなされ現在は緑の山が復活し、都市景観を美しいものにしている。

市街地に隣接する山々は、昭和初期には神戸の代表的観光地だった。本稿は、六甲山系の二大観光地「六甲山」と「摩耶山」について、地形の特徴を概括したうえで、その観光資源を昭和初期に「名所・名勝」と題して発行された絵葉書から、検討することを目的とする。

なお、本稿では六甲山地の中でも東寄りで最高峰に近いエリアを「六甲山」、摩耶山頂を中心にかつて天上寺のあったエリアを「摩耶山」と呼ぶものとする。

Ⅰ. 六甲山と摩耶山

Ⅰ-Ⅰ 六甲山系の地形と自然

「ろっこうさん」の呼称については諸説あるが、大阪から見て「むこうの山」と呼ばれた山々に、「武庫山」「六甲山」の漢字が当てられたことから、「ろっこうさん」になったという説が有力である¹⁾。六甲山は特定の山の名称ではなく、東は宝塚市から西宮市、芦屋市、神戸市を東西方向に貫いて須磨浦海岸に接する 30km 超の山系を指し、いくつもの峰があり最高峰は標高 931m である。この山系は海の向こうの淡路島の北端に連なっていて、山稜に沿って阪神・淡路大震災を引き起こした野島断層を含む六甲・淡路島断層が走っている。摩耶山は標高 702 メートルで六甲山地に含まれる。

地質はほとんどが花崗岩で形成されており、もろく崩れやすい。また保水力・保養力に乏しいので、ひとたび荒廃すると植生の回復が難しい特質がある。明治初期の六甲山は、樹木の伐採や石材の採取により荒廃し、禿山になっていた。また六甲山系の南面を下る河川は急峻で、大雨で氾濫を繰り返す都度、堤防を高くした結果、多くの川が天井川となった。大雨になれば水を留めることができない山腹斜面は崩壊し、溢れた河川と土砂が川底より低い市街地に押し寄せる。この山系に接する神戸の市街地には、治山・治水が必要不可欠だった。

神戸市最初の砂防堰堤は水源工事として施工された。開港後の人口急増により伝染病等が発生し、生活環境を整備する必要から神戸市は 1893（明治 26）年より水道事業に着手、その後 1896 年（明治 29）年に河川法、1897 年（明治 30）年に砂防法、森林法を制定し、砂防・治山工事に着手した。1901（明治 34）年には水源域での砂防事業とあわせ、市街地への土砂災害防止を目的として造林事業を行うことを決め、1903（明治 36）年から本格的造林事業が実施された。阪神大水害による被害、戦争による中断等があったが植林は平成期まで続けられ、緑の六甲山が復活した。

気候的には、温暖な瀬戸内海気候区に属し、10 cm 以上の積雪日数は平年で冬期に2日程度である。山頂付近は降雨量が多く、ブナ林などの落葉広葉樹林が主体となる寒冷な気候となっている。

南麓の気候は温和で、北麓の気候は寒暖の差が大きい。

1-2 六甲山系の観光開発

1985年に六甲山に初めて別荘を建てたのは、居留地に住んだ英国人アーサー・ヘスケス・グルームである。グルームの勧めで友人たちが次々に別荘を建て、山上は別荘地となった。グルームは1903年に日本で初めてのゴルフ場「神戸ゴルフ倶楽部」を創設、やがて日本人富裕層も訪れるようになった。「山で遊ぶ」という発想がなかった日本人に、ゴルフ・登山・スキーといったスポーツは興味深かったことだろう。大正・昭和期になると交通系の企業が開発を推進し、別荘分譲地、ホテル、貸別荘、バンガロー村やテント村が整備され、乗り物で山へ行って景色や食事を楽しむ観光スタイルが定着した。こうして、外国人のレジャーに始まった六甲山は、都市に隣接したリゾート地として発展を遂げた。

摩耶山には、646(大化2)年に開創された忉利天上寺(とうりてんじょうじ)が存在し、修行僧や参拝者を集めた。そして、1925(大正14)年に摩耶鋼索鉄道株式会社(現神戸六甲鉄道株式会社)²⁾が摩耶ケーブルを開業したことで、この寺院を観光資源により多くの参拝者が集まるようになった。ケーブルカーを利用すれば険しい山道を歩くことなく詣でられるので、天上寺及びケーブル駅周辺は格好の観光地になった。さらに、1955(昭和30)年に、神戸市が摩耶山頂に遊園地とロープウェイを整備した³⁾ことで、寺院を中心としてきた摩耶山観光に変化が生じた。しかし、1970年代初頭に遊園地が閉園したことに加え、1976(昭和51)年に天上寺は焼失してしまい、摩耶山は観光資源を失ったといえる。

六甲山と摩耶山の観光資源(観光施設、交通機関等)の推移は表1の通りである。

2. 昭和初期に発行された六甲山と摩耶山の絵葉書

六甲山と摩耶山の名所・名勝を題した当館所蔵の絵葉書には、「六甲山登山記念」(資料番号: No.258-1~No.258-9)、「六甲名所」(資料番号: No.259-1~No.259-12)、「摩耶山名勝」(資料番号: No.13-1~No.13-6)の代表的な3つの資料群がある。

いずれも発行年の記載はないが、用いられた写真は昭和初期に撮影されたことがわかる。本章では、これらの絵葉書の掲載写真とスタンプから、昭和初期に紹介された六甲山と摩耶山の観光資源について検証したい。

2-1 「六甲山登山記念」(資料番号: No.258)

「六甲山登山記念」と題された No.258 のシリーズには9枚の絵葉書が残されている。1枚ずつに異なるスタンプが押されている点は特徴的である。この絵葉書群から昭和初期の観光目的、すなわち市民・観光客が六甲山系で楽しんだアクティビティを見てみると、景観、スポーツ、乗り物に大別できる(表2)。

袋には「SOUVENIR OF ROKKO」と題が印字され、各はがきに印刷されたテーマも英訳されている。開港以来の神戸に居留する外国人や、神戸港から訪れる外国人に向けた情報発信も意識されたことがわかる。

表1 六甲山・摩耶山における観光施設・交通機関の推移

年号	事柄
1895 M28	グルームが三国池付近に別荘を建てる
1903 M36	グルームが神戸ゴルフ倶楽部 開設
1912 T1	阪神クラブ 開設
1925 T14	摩耶ケーブル 開業
1925 T14	六甲阪急倶楽部 開設
1928 S3	裏六甲ドライブウェイ 開通
1929 S4	六甲山ホテル（宝塚ホテル六甲山分館） 開業（～2015）
1929 S4	表六甲ドライブウェイ 開通
1929 S4	摩耶山温泉 仮営業開始（1961摩耶観光ホテルとして再営業）
1931 S6	六甲登山架空索道（ロープウェイ） 開業（～1944）
1932 S7	六甲ケーブル 開業
1932 S7	山上周遊道路 開通
1934 S9	東六甲ドライブウェイ 開通
1934 S9	六甲オリエンタルホテル 開業（～2007）
1936 S11	凌雲荘 開業（～2001）
1937 S12	六甲カンツリーハウス 開業
1938 S13	阪神大水害
1945 S20	第二次世界大戦終結
1950 S25	六甲カンツリーハウス 再開
1952 S27	神戸ゴルフ倶楽部 再開
1952 S27	新池スケート場 開設
1955 S30	摩耶ケーブル 再開
1955 S30	奥摩耶ロープウェイ 開業
1955 S30	奥摩耶遊園地 開業（～1970年代初頭）
1956 S29	表六甲ドライブウェイ 再開
1957 S32	回る十国展望台 開業（～2002）
1961 S36	摩耶観光ホテル 開業（～1967）＊～1994頃まで転活用
1961 S36	芦有道路 開通
1962 S37	裏六甲有料道路 開通
1964 S39	六甲山人エスキー場 開業
1970 S45	グランドホテル六甲スカイヴィラ 開業（～2022）
1970 S45	神戸摩耶ロッジ（後にオテル・ド・摩耶） 開業（～2021）
1970 S45	六甲有馬ロープウェイ 開業
1976 S51	摩耶山天上寺全焼
1976 S51	六甲山牧場 一般公開
1978 S53	六甲山フィールドアスレチック（現六甲山アスレチックパークGREENIA） 開業
1981 S56	六甲ケーブル山上駅展望台「天覧台」に改称
1991 H3	布引ハーブ園 開園
1991 H3	神戸布引ロープウェイ「神戸夢風船」 開業
1995 H7	阪神・淡路大震災
1995 H7	六甲ケーブル 再開
1995 H7	六甲有馬ロープウェイ（裏六甲線、表六甲線） 再開
2001 H13	摩耶ケーブル、摩耶ロープウェイ 再開
2003 H15	六甲ガーデンテラス 開業
2010 H22	六甲ミーツアート 開始
2019 H31	六甲山サイレンスリゾート 開業

表2 名勝と観光目的			
資料番号	資料名称	絵葉書写真のテーマ	スタンプ（文字・絵柄）が示すもの
2D-258-1	山間のロープウェイ	乗り物	スポーツ（「登山記念」）
2D-258-2	大楠公の銅像	景観	景観（最高峰）
2D-258-3	山上スキー場	スポーツ（スキー）	スポーツ（スキー）
2D-258-4	山上テント村	スポーツ（登山）	スポーツ（テント村）
2D-258-5	天狗岩よりの眺望	景観	スポーツ（「ハイキング」）
2D-258-6	天狗岩の印象	スポーツ（登山）	スポーツ（「MT.ROKKO」）
2D-258-7	ゴルフ場所見	スポーツ（ゴルフ）	スポーツ（ゴルフ）
2D-258-8	極楽溪の奇勝	景観	スポーツ（登山）
2D-258-9	天狗岩の景観	景観	乗り物（ドライブウェイ）

No.258-1（六甲山名勝）山間のロープウェイ

1931（昭和 6）年に開業した六甲山登り口駅と六甲山上駅 1.567km を結んだ六甲登山架空索道が掲載され、「六甲登山記念」の文字スタンプが押されている。

東洋一の長距離を謳い人気の高い乗り物だったが、第二次世界大戦中の 1944（昭和 19）年に、金属供出のため廃線となった。



No.258-2（六甲山名勝）大楠公の銅像

1935（昭和 10）年の楠公六百年祭を記念して六甲山頂に建てられた楠木正成像⁴⁾を被写体とし、「六甲山最高峰」の文字スタンプが押されている。

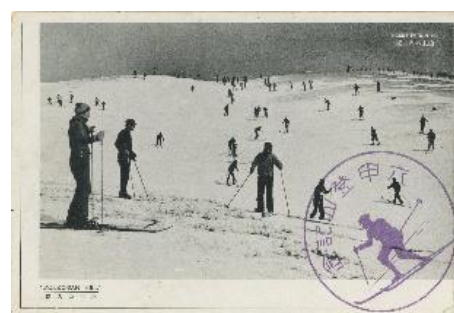
海拔 932 メートルの文字通り最高峰に設置されたが、像は第二次世界大戦中の金属供出で姿を消した。



No.258-3（六甲山名勝）山上スキー場

1903（明治 36）年開業の神戸ゴルフ倶楽部の冬の風景に、スキーヤーの絵柄と「六甲登山記念」の文字スタンプが押されている。

六甲山上のゴルフ場は冬場に閉鎖され、ウインタースポーツの場となっていた。写真の人々は軽装で、競技ではなく娯楽としてのスキーを楽しんでいたと思われる。



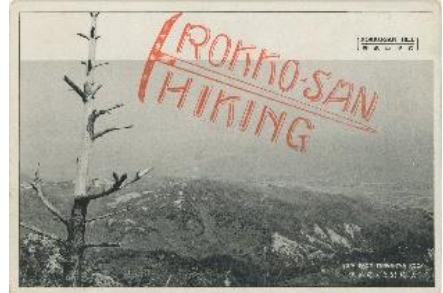
No.258-4 (六甲山名勝) 山上テント村

山腹に張られたテントの写真に、「六甲登山記念」の文字とテント村のイラストが描かれたスタンプが押されている。1932(昭和 7)年に開業した六甲ケーブルの山上駅の東にあった天狗橋傍のテント村と思われる。



No.258-5 (六甲山名勝) 天狗岩よりの眺望

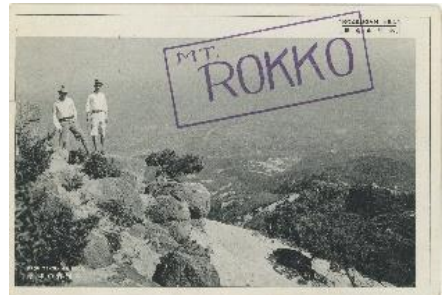
天狗岩からの大阪湾方向を見た風景に、「ROKKO-SAN HIKING」の文字とピッケルの絵が描かれたスタンプが押されている。この場所は現在も六甲山屈指のビューポイントで、阪神間、泉南方面、神戸市、淡路島までも見渡すことができる。



No.258-6 (六甲山名勝) 天狗岩の印象

西洋人と思しき登山者が天狗岩に立つ写真に、「MT.ROKKO」の文字スタンプが押されている。

撮影場所は No.258-5 とほぼ同じである。眺望、登山径路、交通手段、宿泊施設の揃った天狗岩周辺は山上リゾート地として発展し、名勝として多くの絵葉書に登場する。



No.258-7 (六甲山名勝) ゴルフ場

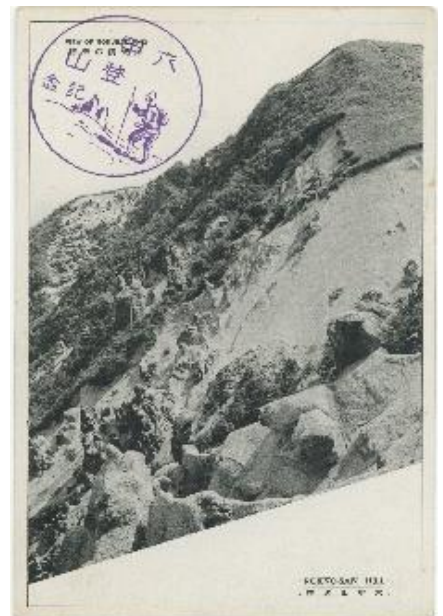
グループが1903年に開いた日本初のゴルフ場「神戸ゴルフ倶楽部」の風景写真に、ゴルフをプレーする人の絵と「六甲登山」の文字のスタンプが押されている。

明治期に居留地の外国人が根付かせた六甲山のゴルフ・登山・スキー・スケートといったスポーツが、昭和期の観光資源となって絵葉書に登場している。



No.258-8 (六甲山名勝) 極楽溪の奇勝

極楽溪と呼ばれた崖の写真に、杖を突いて登る登山者の絵柄と「六甲登山記念」の文字のスタンプが押される。現在の六甲ガーデンテラス(神戸市灘区六甲山町五介山1877-9)の東側にある極楽茶屋跡の南側の崖を撮影したと思われる。樹木に覆われている現状と違い、昭和初期には禿山だったことがよくわかる。



No.258-9 (六甲山名勝) 天狗岩の景觀

天狗岩を北から見た景觀写真に、ドライブウェイを疾走する自動車の絵と「六甲登山観光記念」の文字が入ったスタンプが押されている。自動車で山頂へ行行って景觀やスポーツを楽しむ西洋的な観光スタイルも存在していたこと、それが理想的な姿として描かれたことが想像できる。



2-2 「六甲名所」(資料番号：No.259)

「六甲名所」と題された 12 枚の絵葉書からは、売れ筋のモノクロ写真に彩色を施したものを、オフセット印刷で量産・販売していたと推察される。彩色葉書は外国人観光客に人気が高く、タイトルに英訳が添えられていることから、外国人に販売する想定だったのだろう。すべての裏面に「六甲山頂玉房茶屋」のスタンプが押されているが、この茶屋は 1931(昭和 6)年と 1939(昭和 14)年発行の地図⁵⁾には登場せず、詳細は不明である。また、12 枚のうち 4 枚(No.259-3、No.259-5、No.259-6、No.259-9)にロープウェイの写真が用いられたように、この乗り物自体が観光客を集める観光名所だったともいえよう。

なお彩色前のモノクロ写真が含まれるシリーズとして、当館所蔵の「六甲名勝」(資料番号：No.11-1~No.11-8)を紹介しておきたい。No.259-1 は No.11-8、No.259-2 は No.11-4 の写真を彩色したもので、この場所が観光名所としてよく知られていたことがうかがえる。また No.11-7 と別写真で同じアングルの写真を着色したのが No.259-4 である。写真は異なるが No.11-1 はドライブウェイ、No.11-2 はロープウェイで、当時人気のあった名勝・名所の絵葉書が繰り返し販売されていたことがわかる。

No.259-1 (六甲名勝) 六甲開祖の碑

1912(明治 45)年に建てられた六甲山開祖グルームの功績をたたえた石碑で、その周辺に学校の遠足らしい人々が集まっている。観光名所だったこの碑は反英運動の高まりにより昭和 15(1940)年に引き倒された⁶⁾。



▲参考：No.11-8

No.259-2 (六甲名勝) 山頂の雄姿

写真は極楽茶屋跡の南面斜面で、左に見えるのは現在の全六甲縦走路と思われる。現在は植林され緑に覆われているが、撮影された頃は岩肌剥き出しだったことがわかる。



▲参考:No.11_4

No.259-3 (六甲名所) 山間を滑るロープ・ウェイ

No.259-5 (六甲名所) 山腹を縦走するロープ・ウェイ

No.259-6 (六甲名所) 溪谷を走るロープ・ウェイ

No.259-10 (六甲名所) 山麓ロープ・ウェイ昇口駅

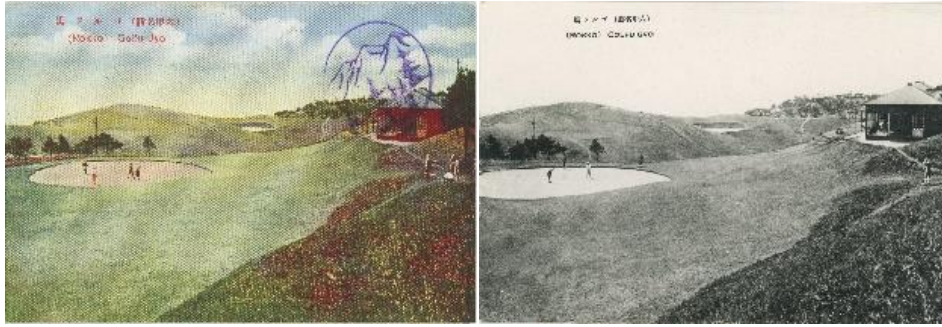
1931(昭和 6)年 9 月竣工の六甲登山架空索道の写真が使用されていて、それ以降に発行されたことがわかる。いずれも雄大な山景を背景に運行されるロープウェイの姿で、人気を博した乗り物の写真を記念に持ち帰らせたり、手渡された人が魅力を感じて訪れたりするようにとの意図も感じられる。ロープウェイは六甲山を観光地として大いに発展させたといえるだろう。



▲参考:No.11-2

No.259-4 ゴルフ場

グループが 1903(明治 36)年に開いた日本初のゴルフ場・神戸ゴルフ倶楽部を撮影した写真が用いられている。関西を中心に多くの作品を残した建築家ヴォーリズによって、1932(昭和 7)年に建替えられたクラブハウスが写っていることから、それ以降の撮影・発行とわかる。この建物は 2007 年に経済産業省の近代化産業遺産に認定され、2014(平成 26)年には国の登録有形文化財(建造物)に登録された。



▲参考:No.11-7

No.259-7 (六甲名勝)三国池

グループが六甲山で最初に別荘を構えた三国池湖畔の写真が用いられている。名勝として名高い三国池は、観光絵葉書にも採用されていたことがわかる。



No.259-8 (六甲名勝)雲ヶ岩

六甲山最高峰付近には仰臥岩、雲ヶ岩、六甲比命神社(のご神体の磐座)、心経岩の巨石群がある。絵葉書裏面の左上に「雲ヶ岩」と印字されているが、この写真は雲ヶ岩ではなく、岩一面に般若心経が刻み込まれた「心経岩」である。



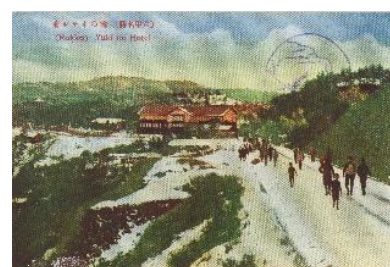
No.259-9 (六甲名勝)スケート

撮影場所は No.259-7 と同じく三国池と思われる。六甲山上には天然沼池だけでなく氷採取のための人工池も多数あり、冬には天然スケート場となるので、山上生活者は滑走を楽しんだという⁷⁾。本格的なスケート場は 1950 年代になってから開設された。(表 1 参照)。



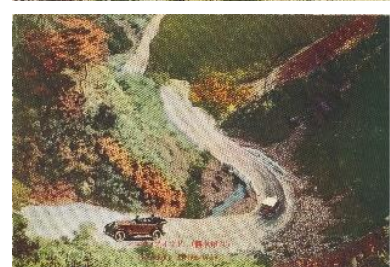
No.259-11 (六甲名勝)雪のホテル前

写真は雪景色の六甲山ホテル前で、記念碑台の下から西を向いて撮影したものと思われる。ホテルが開業した 1929(昭和 4) 年以降の写真だが、展望台や 1934(昭和 9) 年建設の新館が写っていないことからそれ以前に撮影されたものであることが推察できる。



No.259-12 (六甲名勝)ドライブ・ウェイ

ドライブウェイと坂道を昇り降りする自動車の写真が用いられている。周囲の地形から、1928(昭和 3) 年に開通した裏六甲ドライブウェイとみられる。竣工したばかりのドライブウェイの絵葉書は多数発行された。



2-3 「摩耶名勝」(資料番号：No.13)

もうひとつの観光地である摩耶山の名勝を集めたシリーズ(No.13)と、代表的スポットの写真1点(No.158-1)を紹介する。摩耶山観光には、寺院参拝という六甲山では見られなかった要素が加わる。寺院を持たない六甲山に対し摩耶山は古くから修行の場という側面があり、摩耶山切利天上寺が参拝客を集めた。

「摩耶名勝」は袋の表書きから8枚組であることがわかるので、シリーズの1枚が欠落している。写真は摩耶ケーブルの駅、駅付近の様子、かつての天上寺の建造物である。

No.13-1 (摩耶名勝)頂上摩耶駅

摩耶ケーブルは摩耶山切利天上寺への参詣路線として1925年(大正14)年に開業した。運営する摩耶鋼索鉄道株式会社は、駅付近の整備にも力を注いだ(No.13-2、No.13-6参照)。写真は摩耶駅(現「虹の駅」)で、この建造物は現在も使われている。



No.13-2 (摩耶名勝)休憩場外景

摩耶ケーブル山上の摩耶駅を降りたところに、摩耶鋼索鉄道株式会社が整備した遊園地の写真である。遊具で遊ぶ子供と食堂・売店の建物が写っている。動物小屋があることから、1926(大正15)年以降の発行であることがわかる⁸⁾。



No.13-3 (摩耶名勝)天上寺本堂

摩耶山切利天上寺の本堂に参拝客が訪れている写真である。摩耶ケーブルの駅から参道を登り石段を登り詰めると、この本堂が正面にあった。本堂手前の右に多宝塔、左には夫人堂が見える。



No.13-4 (摩耶名勝)奥の院

焼失した天上寺は工事が困難な場所に建っていたため、寺の敷地と神戸市所有の土地を交換して、現在の場所(神戸市灘区摩耶山町2-12)に再建されることになった。この奥の院は元の敷地にあったもので、本堂から離れていたため焼失を免れたが換地の後に撤去され現在は存在しない。



No.13-5 (摩耶名勝)頂上の塔

本堂の右側にあった多宝塔の写真で、観光客が写りこんでいる。この建物は1976(昭和51)年の火災で焼失した。現在この場所は摩耶山史跡公園になっており、礎石などから位置を確認できる。

No.13-6 (摩耶名勝)休憩所

摩耶ケーブル駅周辺の写真で、No.13-1の近くにあった休憩所を撮影している。幼い子供が写っていることから、ケーブルによって参拝が容易になり、天上寺が家族で訪れる場になったことが想像できる。この場所は現在、展望台になっている。

No.158-1 神戸摩耶山

天上寺参道の330段の石段の写真で、階段上のガス灯(実際は灯油)が写りこんでいる。同アングルの絵葉書が量産されていることから、この場所は撮影スポットだったと思われる。人々の服装から、目的は登山ではなく寺に参拝することだったことが読み取れる。



2章で紹介した絵葉書群を表2の分類に沿って観光目的別に整理すると、六甲山と摩耶山の観光目的の違いがよくわかる(表3)。六甲山は自然・眺望やスポーツ、摩耶山は寺院参拝が中心となっており、開山の歴史の違いが後世の観光資源にも影響を与えていることは明らかである。

表3 六甲山・摩耶山の観光目的の比較						
写真の 撮影場所	資料 番号	資料名称	景観	スポ ーツ	乗り物 (関連施 設含む)	寺院
六甲山	2D-259-1	六甲開祖の碑	○			
	2D-259-2	山頂の雄姿	○			
	2D-259-3	山間を滑るロープ・ウェイ			○	
	2D-259-4	ゴルフ場		○		
	2D-259-5	山腹を縦走するロープ・ウェイ			○	
	2D-259-6	溪谷を走るロープ・ウェイ			○	
	2D-259-7	三国池	○			
	2D-259-8	雲ヶ岩	○			
	2D-259-9	スケート		○		
	2D-259-10	山麓ロープ・ウェイ昇口駅			○	
	2D-259-11	雪のホテル前	○			
	2D-259-12	ドライブ・ウェイ			○	
摩耶山	2D-13-1	頂上摩耶駅			○	
	2D-13-2	休憩場外景			○	
	2D-13-3	天上寺本堂				○
	2D-13-4	奥の院				○
	2D-13-5	頂上の塔				○
	2D-13-6	休憩所			○	
	2D-158-1	神戸摩耶山				○

おわりに ―観光資源の変容―

六甲山観光の系譜は、「六甲山登山記念」「六甲名所」で紹介された観光資源に始まる。これらの絵葉書からは、登山やスポーツを楽しむ、六甲ケーブルやドライブウェイを利用して景勝地や造られた観光スポットを訪ねるレジャー型観光が中心だったことが読み取れた。第二次世界大戦中はケーブルもロープウェイも金属供出のため廃止を余儀なくされたが、ケーブルが撤去作業に至らずに終戦となったことが幸いし、復興は早かった。1950 年以降は六甲ケーブル山上駅を基点に、観光施設、宿泊施設、企業の保養所などが建設される。2000（平成 12）年以降は過去の施設の跡地利用（凌雲荘⇒六甲ガーデンテラス）やリニューアルオープン（六甲山ホテル⇒六甲山サイレンスリゾート）など、更新を重ねながら余暇を楽しむ人々が訪れる地として継続している。2010 年からはエリア一体を活用したアートイベント（六甲ミーツ・アート）が開催され、新たな客層を呼び込むことにも成功している。

一方、昭和初期までの摩耶山観光は切利天上寺を中心に発展した。絵葉書「摩耶名勝」に含まれるのは、天上寺の建造物と参拝する人々のために敷設されたケーブルの駅周辺である。観光資源が寺院であった点が、六甲山と大きく異なると言えよう。戦中の金属供出によって営業を停止した後、摩耶ケーブルは 1955（昭和 30）年に再開した。神戸市はこれに合わせ掬星台⁹⁾に展望台やジェットコースターを備えた「奥摩耶遊園」を整備、遊園地とケーブル山上駅を奥摩耶ロープウェイで結んだ。このことで摩耶山観光に変化が生じたが、遊園地は 20 年足らずで閉園、1976（昭和 51）年に天上寺が火災で焼失し、「摩耶名勝」に見られた風景や賑わいは完全に失われてしまった。新たに観光資源を模索することになった摩耶山だが、掬星台が国内屈指の夜景スポット¹⁰⁾とし

て知られるようになった。2005（平成 17）年に財団法人神戸市都市整備公社（現在の一般財団法人神戸住環境整備公社）が、まやビューライン¹⁾も含めた整備を行い、外国人旅行者も含め観光客を集める場所となっている。天上寺は山頂北側の創建の地に再建中で、参拝客は途絶えていない。さらに近年は地元団体の案内で廃墟（摩耶観光ホテル）や遺構（奥摩耶遊園）などを巡る「マヤ遺跡観光」が注目されている。

また、六甲山・摩耶山の魅力ある自然を活用し、自然保護との最適なバランスを保ちながら活性化を図ることを目的として神戸市は「六甲山再生委員会」を設置し、六甲山の目指すべき方向性及びそれを実現するための方策について協議を行い、2019 年 3 月に「六甲山グランドデザイン」が策定された¹²⁾。

謝辞

本稿の調査・研究にあたり、有益なご教示をいただきました。ここに改めて深謝いたします。

前田 康男（「六甲歴史散歩会」主宰、神戸史学会会員、神戸ヒヨコ登山会会員）

参考文献

- ・平凡社地方資料センター『郷土歴史大辞典 兵庫県の地名 I』平凡社 1999 年
- ・新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史 産業経済編Ⅳ 総論』神戸市 2014 年
- ・森田康之助『湊川神社史・下巻（鎮座篇）』湊川神社 1987 年
- ・福原勝之助『六甲山頂記念碑付近明細地図』六甲山ホテル 1931 年
- ・為定重行『最新実測六甲山頂明細図』親交会 1939 年
- ・新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史 生活文化編』神戸市 2020 年
- ・六甲摩耶鉄道株式会社社史編集委員会『六甲ケーブル開業 50 年史 六甲山とともに六十年』六甲摩耶鉄道株式会社 1982 年
- ・財団法人日本経営史研究所『阪神電気鉄道百年史』阪神電気鉄道株式会社 2005 年
- ・京阪神急行電鉄株式会社 茂原祥三『京阪神急行電鉄五十年史』京阪神急行電鉄株式会社 1959 年
- ・神戸市建設局公園砂防部六甲山整備室『六甲山森林整備戦略』神戸市 2012 年

注

- 1) 平凡社地方資料センター『郷土歴史大辞典 兵庫県の地名 I』平凡社、1999 年、p.97
- 2) 六甲摩耶鉄道株式会社は 2013 年に阪神総合レジャー株式会社との合併により六甲山観光株式会社に社名を変更。2024 年に神戸六甲鉄道株式会社に社名変更し、観光事業を（新）六甲山観光株式会社に会社分割した。現在、摩耶ケーブルは株式会社こうべ未来都市機構が運営している。
- 3) 新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史 産業経済編Ⅳ 総論』神戸市、2014 年、p.717
- 4) 森田康之助『湊川神社史・下巻（鎮座篇）』湊川神社、1987 年、p.364
- 5) 福原勝之助『六甲山頂記念碑付近明細地図』六甲山ホテル、1931 年。為定重行『最新実測六甲山頂明細図』親交会、1939 年
- 6) 1942（昭和 17）年とする記述が散見されるが、1940（昭和 15）年が正しい。1940（昭和 15）年 11 月 20 日付『神戸新聞』「偽善碑ぶつ倒し 六甲山上英人開祖碑消ゆ」、同年 11 月 20 日付『朝日新聞』「六甲の英國 つひに倒る」
- 7) 新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史 生活文化編』神戸市、2020 年、p.220
- 8) 『六甲ケーブル開業 50 年史 六甲山とともに六十年』六甲摩耶鉄道株式会社、1982 年、p.188
- 9) もとは第二次大戦時に旧陸軍が高射砲陣地として切り開いた場所。

- 10) 函館山（北海道函館市）、稲佐山（長崎県長崎市）とともに「日本三大夜景」と呼ばれる。選定者や選定時期は不明。
- 11) 摩耶山の山麓～山上を摩耶ケーブルと摩耶ロープウェーで結ぶ路線の公式愛称。
- 12) 地元住民や民間事業者、学識経験者や国、県、市で構成。<https://www.city.kobe.lg.jp/a64051/shise/kekaku/kezaikankokyoku/rokkomaya/granddesign.html>

阪神大水害の写真記録

衣川 太一

はじめに

1938(昭和13)年7月3日から5日にかけて、台風に刺激された梅雨前線は集中豪雨をもたらし、5日になって阪神間では大規模な河川の氾濫や六甲山の斜面崩壊、土石流などが発生した。この災害は「阪神大水害」と呼ばれ、当時の各区の調査によると、死者616名負傷者984名を生じ、全市の48パーセントに及ぶ戸数が流失または床上・床下浸水の被害を受けた¹⁾。当館に収蔵されている様々な種類の記録から、神戸市の広範な地域を襲い街の様子を一変させた水害の猛威とその後の復旧作業の様子を知ることができる。

Ⅰ 記録写真

神戸という当時人口96万人を抱える大都市の広範囲にわたり被害が発生したため、カメラを持った多くの人たちによって記録された様々な写真が残されている。1936年秋から1941年春までの阪神間を舞台にした谷崎潤一郎の小説『細雪』にも阪神大水害が克明に描かれ、カメラを持って被害の様子を撮影する人物が登場する。水害関係写真をまとめたアルバム「昭和13年 阪神及び裏六甲災害」²⁾(図1)は、当時兵庫県庁の土木技手を務めていた人物が個人的に作成したものと考えられ、山間部や上流部の被害が多く収められている。一方、図2の小曽根家寄贈のアルバムの中には、旅行やレジャーといった家族の記録に交じり、土砂と瓦礫に埋もれた被災直後の元町商店街の光景や、住吉川・宇治川筋の様子を撮影した31枚の水害記録写真が貼付されている³⁾。

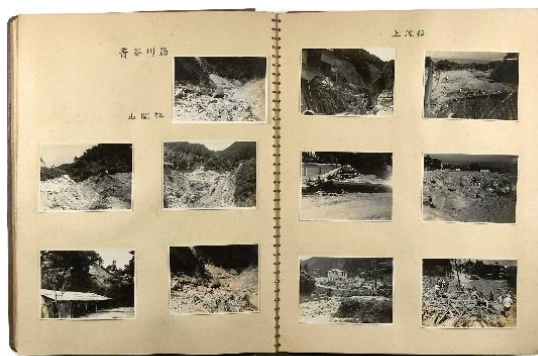


図1 「昭和13年 阪神及び裏六甲災害」

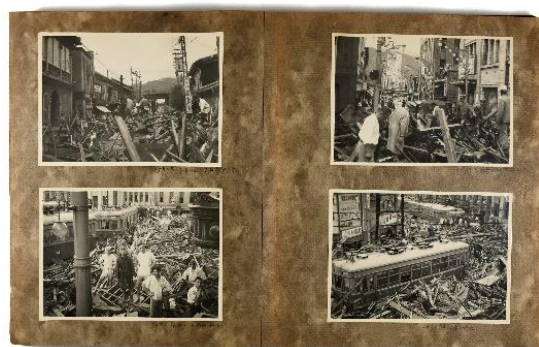


図2 「小曽根喜一郎コレクション⑥」

図3の来歴不明のアルバムは本体に題名や製作者等の情報が記されておらず、仮に「昭和13年(1938年)阪神大水害」(以下「昭和13年大水害」)と名付けられている⁴⁾。皮装幀のしつかりとした造りで写真も117点と豊富に収められ、個々の写真には紙片に活字で印刷された説明文まで添えられている。これによると全ての写真は7月5日から16日の間に撮影されている。当館では全く同じ外装・内容の2冊を所蔵しており、組織的に作成・頒布されたものと推察されるが、アルバムによって画像が左右逆になった写真(裏焼き)が貼付されていたり、トリミング(切り取り)が

異なるものが含まれていたり(図4)することから、一括してプリントされたものではなさそうである。

水害から1年経った1939年に神戸市が発行した『神戸市水害誌附図』⁵⁾(以下『附図』)には水害とその復旧作業や慰霊祭の様子を写した358点の写真が掲載されているが、7月5日から16日の撮影とされる写真105点に限定すると、87点が『昭和13年大水害』と重複し、80%強を占める。『附図』では掲載された写真について、次のように説明している。

「災害状況の写真は、水害突発直後に之を撮影して参考と為さんが為め、市吏員有志に依嘱して、撮影せるものの中より選択せるものである」⁶⁾(同書、巻頭凡例)

『附図』1ページ目に掲載されている「御差遣の大金侍従」を写した2点の写真と同じ紙焼⁷⁾を文書館では所蔵しており、こちらには当時兵庫区の三川口町にあった山根写真館のエンボスが押されている。そのため、『附図』に収められた写真すべてが「市吏員有志」により撮影されたものではないことに注意したいが、文字通り「災害状況」を「災害突発直後」に撮影した写真にはそのようなものが多く含まれていると言えよう。そして、その時期に撮影された写真のみで構成され、『附図』と内容が大きく重複するアルバム「昭和13年大水害」も、基本的には市職員の手による撮影と思われる。

この「昭和13年大水害」と重複する写真が多数貼付されているものの、アルバムの形式や並び、写真の大きさなどが違った「阪神大水害 神戸市内の惨状」も存在する⁸⁾。こちらも2冊あって、使用されている写真の種類や順序には相互に異同が見られる。また撮影期間が7月5日から9日までとさらに短く、山根写真館の写真が複数含まれる等の点が、「昭和13年大水害」とは異なっている。

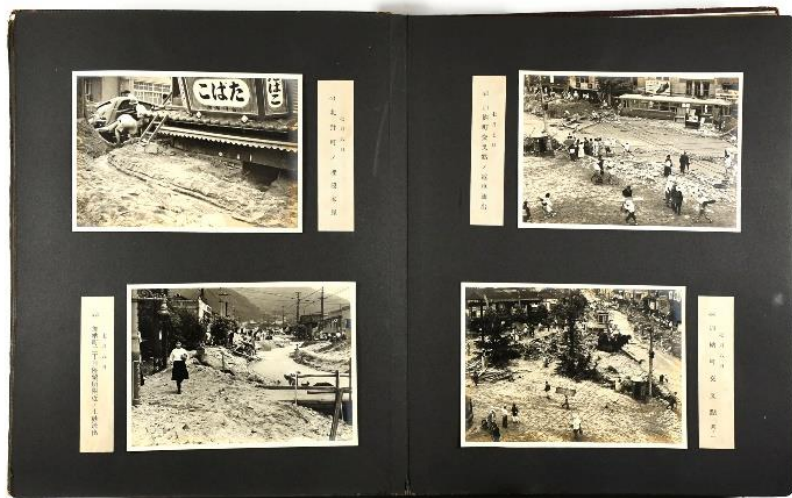


図3 「昭和13年(1938年)阪神大水害」



図4 同前

2 水害イメージの頒布

カメラを持たない人はどう映像と関係していたのだろうか。図5に示した1938年7月8日付の神戸又新日報の記事では⁹⁾、水害からの復興の様子を伝えるとともに、「売れるぞ水害写真」として、被災状況を撮影したブロマイド写真が人気を博している状況を記している。元町1・2丁目付近で販売されていると伝える記事から、交通網が寸断された被災直後に市の中心部でこのような

記録を買い求めたのは、ほかならぬ神戸市民であったかもしれない。当館でもこれら販売や配布を目的としたとみられる、多量に焼かれた同じ写真や、上述のように写真館の名が入れた写真が所蔵している¹⁰⁾。(図 6, 7)



図 5 1938 年 7 月 8 日付『神戸又新日報』



図 6 「阪神大水害関連写真」



図 7 同前

紙焼写真だけではなく、絵葉書も多量に作成販売された。当館では過去に寄贈を受けたり収集したりした阪神大水害関連の絵葉書を約 300 枚所蔵しており、販売当時に絵葉書が入れていたとみられる封筒が付属したものも存在する。また、図 8「阪神沿線魚崎附近水害絵はがき」¹¹⁾や図 9「阪神沿線住吉川水害絵はがき」¹²⁾のように地域を限定したものも見られ、その地区の住人や縁者を対象として頒布されたことが読み取ることができる。

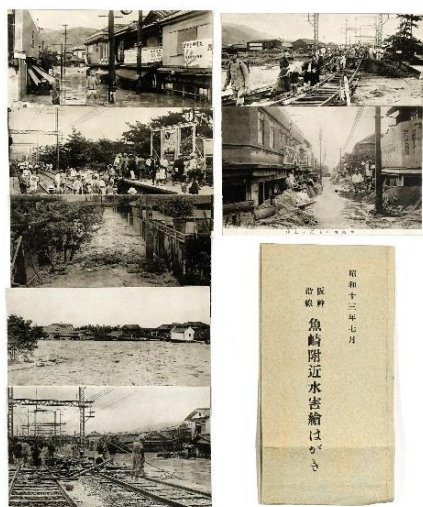


図 8 「阪神沿線魚崎附近水害絵はがき」

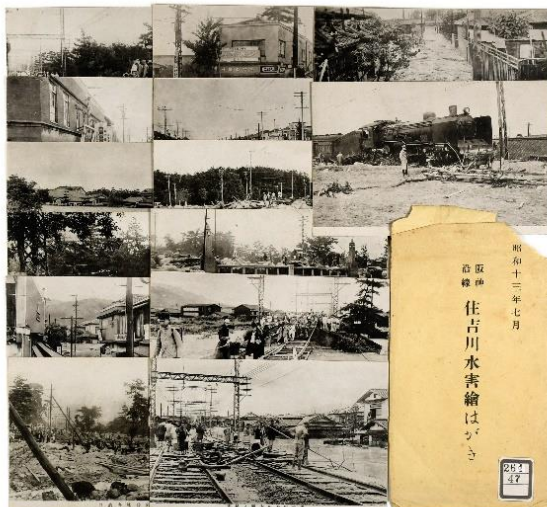


図 9 「阪神沿線住吉川水害絵はがき」

これらの絵葉書には、印刷・発行元が書かれていないもの、また封筒が欠落したセットもあるが、様々な特徴からおおよそ表1の10種に分類可能である。1セットが何枚で構成されていたのかはもはや定かではないが、残存状態からみるとおおむね8枚から16枚であったと思われる。絵葉書上に印刷された「阪神地方水害」や「神戸地方水害」などの副題から同じシリーズに属すると考えられるものの、内容の組み合わせが異なるものや、同じ画像の絵葉書が、異なるタイトルの封筒に収められている事例も存在する。

表1 水害絵葉書の分類

封筒のタイトル	発行者等	副題	絵葉書裏面の表記
昭和十三年七月 神戸附近大水害実況写真	なし	阪神地方水害	「郵便はがき / POST CARD」
昭和十三年七月五日 神戸附近大水害 特報	錦水社	神戸大水害 特報	なし
昭和十三年七月五日 神戸附近大水害の実況写真	錦水社	なし	なし
昭和十三年七月五日 神戸附近大水害の実況写真(第二報)	錦水社	なし	なし
昭和十三年七月五日 神戸附近大水害の実況写真(第三報)	錦水社	なし	なし
昭和十三年七月 神戸地方大水害実況と復興に努むる市民	なし	神戸地方水害	「郵便はがき / CARTE POSTALE」、または「郵便はがき / POST CARD」
昭和十三年七月 神戸水害実況はがき	なし	神戸地方水害	「郵便はがき / CARTE POSTALE」、または「郵便はがき / POST CARD」
神戸地方水害実況写真	「歴史写真 会大阪支社 印行」等*	なし	なし、または「郵便はがき」、または「郵便はがき」
阪神沿線魚崎附近水害絵はがき	なし	なし	郵便はがき / CARTE POSTALE(灰色)
阪神沿線住吉川水害絵はがき	なし	なし	郵便はがき / CARTE POSTALE(灰色)

*他に「官界新聞社印行」「時事写真新聞社印行」、および無記載のものが確認されている

3 増殖するイメージ

図10の3枚の絵葉書はそれぞれ別のセットに含まれていた。『昭和十三年七月 神戸地方大水害実況と復興に努むる市民』というセットに含まれる「泥濘に埋まれるトラック」¹³⁾、『神戸地方水害実況写真』の「泥濘に埋まるトラック」¹⁴⁾、そして『昭和十三年七月五日 神戸附近大水害の実

況写真 第三報』(錦水社)の「泥の中に埋れるトラック」¹⁵⁾と少しずつ違った題が付けられている。印刷具合も様々で、写っている範囲も異なるため、一見すると同じ場所で撮影された別個の写真と感じられるが、細部を比較すると、どれも同じ瞬間を撮影した同じ写真であることが分かる。

さらにこれら3枚の画像を重ね合わせてみると、それぞれの絵葉書にしか写っていない、他の絵葉書とは重ならない箇所が現れる(図11 黄色)。つまり、同じ絵葉書を使いまわしたのではなく、元々1枚の大きな写真が存在し、それを各々の絵葉書の作成者が様々にトリミング(切り取り)して使用している。



図11 図10の3枚の重ね合わせ

黒実線:「泥濁に埋まれるトラック」

青破線:「泥濁に埋まるトラック」

赤実線:「泥の中に埋れるトラック」



図10 同じ瞬間を撮影した異なる絵葉書

他の例も当館の所蔵資料から見出すことができる。図12の絵葉書は発行者不明のセット『昭和十三年七月 神戸地方大水害実況と復興に努むる市民』に含まれる「居留地の濁流(神戸地方水害)」¹⁶⁾である。先に触れたアルバム『昭和13年大水害』には「七月八日 元居留地伊藤町附近」という、より詳しいキャプションの付けられた同じ写真が貼付されている¹⁷⁾(図13)。絵葉書では鮮明ではないが、一方の紙焼き写真では奥に元町の大丸百貨店が確認できることから、現在の東遊園地の北西角付近から西に向かって撮影していることが分かる。紙焼は経年劣化しているものの画質が良く、オリジナルのネガから直接焼かれた可能性がある。

こちらも重ね合わせてみると、当時の葉書のサイズであるおおむね14cm×9cmの比率の範囲に収まるように、写真の左右を切り取ってトリミングしていることがよく理解できる(図14)。上下でわずかに重ならない部分が出ているので、このアルバムの写真とは別に焼かれたものから版を起こして絵葉書を作ったと考えられる。

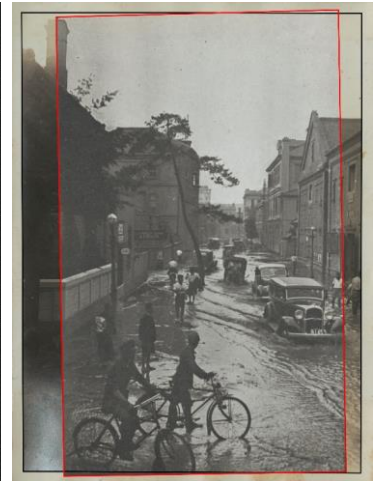


図 12 「居留地の濁流 図 13 「七月八日 元居留地伊藤町附近」 図 14 前 2 枚の重ね合わせ
(神戸地方水害)」

4 ニュースメディアとしての絵葉書

上述した大丸百貨店が写った箇所を並べて比較してみると、紙焼き写真(図 15 右側)のほうが精細で描写力が優れていることが明瞭となるが、1枚ずつ印画紙の上に手作業で焼き付けた上に現像処理が必要な写真と比べ、網版というものを使い一度に多量に印刷できる絵葉書(同左側)は、1枚当たりの単価を低く抑えることができる。当館所蔵資料に一般向けの販売物である絵葉書が多数存在するのは、郵便葉書という実用の面だけではなく価格の点からも入手しやすく、広く市中に出回っていたことが大きいのではないかと考えられる。



図 15 図 12 と 13 に写った大丸百貨店の比較

ここでは「絵葉書」と便宜的に称しているものの、当時法令¹⁸⁾により表記が必要だった「郵便はがき」の文字等、葉書であることを示す印刷が全くされていないものも存在している(「特報」「二報」「三報」等)。図 16 のように未使用のまま絵葉書用アルバムに収めて保管されたものもあり¹⁹⁾、必ずしも葉書としての役割を前提としていたものではなかったようである。またこれら水害絵葉書には、当時頻繁に使用されていた彩色が施されたものが見られず、発行のスピードや時事性が優先されたと考えられる。

絵葉書セット『昭和十三年七月五日 神戸附近大水害の実況写真 第三報』（錦水社）に含まれる「神戸元町通の濁水」²⁰⁾（図 17）は、毎日新聞社が所蔵する写真（「川からあふれ出た濁流により街は泥で埋め尽くされた」）を使用したものであることが確認できる²¹⁾。

この『第三報』には他に図 18 の「宇治川陸橋に押寄せた倒壊(マ)家屋」²²⁾（朝日新聞「山手通の橋橋（神戸市電山手線の陸橋）にせき止められて折り重なった宇治川流域の流失民家や流木」²³⁾）、および図 19「新湊川の濁流」²⁴⁾（朝日新聞「天王川の氾濫で水没した湊区下三条町」²⁵⁾）と、別々の新聞社の写真を使用した絵葉書が含まれており、特定の新聞社が直接関与して発行されたものとは考えにくい。他のセット内でも新聞社所蔵の写真を使用した絵葉書が見いだされ、同じく絵葉書が多量に作成された 1923 年の関東大震災と比して、ニュース映画や週刊誌・グラフ雑誌等の視覚メディアが発達した昭和初期²⁶⁾においても、依然として絵葉書は「ニュース画像の頒布流通システム」という側面を担っていたことが読み取れる。

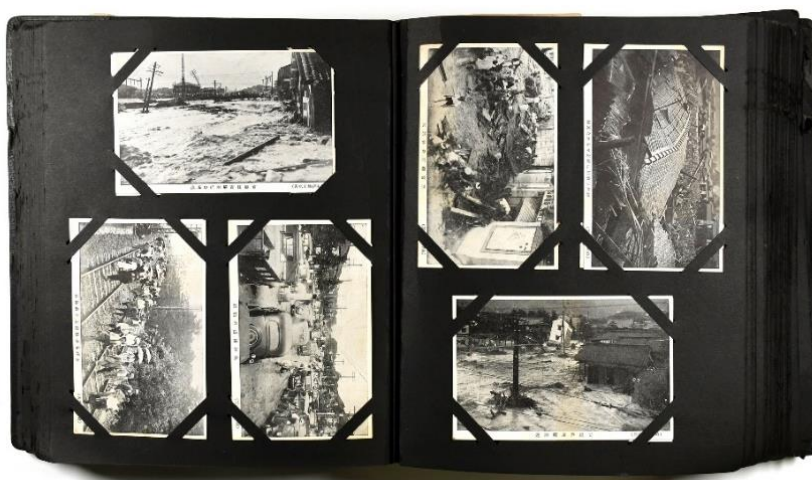


図 16 「小曾根喜一郎コレクション③絵葉書アルバム」

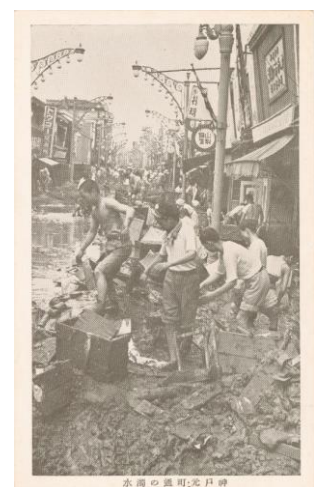


図 17 「神戸元町通の濁水」



図 18 「宇治川陸橋に押寄せた倒壊(マ)家屋」



図 19 「新湊川の濁流」

5 伝えるイメージ

撮影者が異なるにもかかわらず同じ被写体を収めたものも多く見いだされる。なかでも加納町交差点で土砂に埋もれ、流れてきた木材で前面が破壊された市電車両の姿は、当館所蔵の 3 種の紙焼写真と 1 種の絵葉書に認められ、衝撃的な被害を伝える象徴的な被写体であったことが分かる（図 20 絵葉書「加納町付近の災害」²⁷⁾、図 21「加納町交差点の電車流出」²⁸⁾、図 22「（無題）阪神大水害関連写真」²⁹⁾、図 23「加納町 3 丁目交叉点附近」³⁰⁾）。



図 20 「加納町付近の災害」



図 21 「加納町交差点の電車流出」



図 22 「(無題) 阪神大水害関連写真」



図 23 「加納町 3 丁目交叉点附近」

絵葉書「阪神三宮駅附近の出水」³¹⁾(図 24)とアルバム『昭和 13 年大水害』の「三宮そごう前附近 その 1」³²⁾(図 25)も写された時期やカメラの向きが異なるが、双方とも省線(現・JR)三ノ宮駅の高架からそごう百貨店(現・神戸阪急)と溢れた土砂を記録している。現在でも同じ場所に立つと同じ空間のひろがりを見ることができる、神戸市民にとって馴染み深いビューポイントから撮影することにより、災害による日常の変化を捉えている。



図 24 「阪神三宮駅附近の出水」



図 25 「三宮そごう前附近 その 1」

先に紹介した元町商店街を写したのものも多く、撮影場所が異なるにもかかわらず、すずらん灯が印象に残る縦長の構図が取られているものが多い(図 26 絵葉書「元町通の浸水」³³⁾、図 27 同「元町通りの浸水」³⁴⁾、図 28 アルバム『昭和 13 年大水害』「減水後の元町通 6 丁目」³⁵⁾)。

現在ではアーケードが設置されて雰囲気は変わったものの、両側の商店と屋根より高いすずらん灯・先に伸びる元町通りという、当時の人々が元町商店街に抱いていたイメージの一端がこの縦長の構図の多用から感じ取ることができる。

残された写真や絵葉書などからは、水害の直接的な猛威を記録したものだけではなく、市民によく知られた場所の様子を伝えるものも被写体として多く選ばれていたことを読み取ることができる。なお、当時神戸で一番の繁華街であった新開地は頻繁に絵葉書の素材となっていたが、被害が少なかったためか、水害に関する絵葉書は確認されていない。



図 26 「元町通の浸水」



図 27 「元町通りの浸水」



図 28 「減水後の元町通 6 丁目」

おわりに

本稿で取り上げたのは、当館が所蔵する阪神大水害関連の写真記録や絵葉書資料の一部に過ぎない。今後はこれらをデジタル化し、閲覧・利用しやすいデジタル画像として公開を進める予定である。神戸が乗り越えてきた災害の歴史を視覚的かつ多面的に提供することは、防災意識涵養の一助となるだろう。さらに、それを記録した人や受け取った人々の視点が構成する「災害記録の文化史」という一面にも光が当たることも期待したい。

注

- 1) 神戸市役所編纂・発行『神戸市水害誌』1939 年、p245-246
- 2) 「昭和 13 年 阪神及び裏六甲災害」小林嘉道氏寄贈、1938 年(2B-34-1)
- 3) 「小曾根喜一郎コレクション⑥」小曾根実氏寄贈、1938 年頃(2B-12-6)
- 4) 「昭和 13 年(1938 年)阪神大水害」1938 年頃(2A-1-3, 4)
- 5) 神戸市役所編纂・発行『神戸市水害誌附図』1939 年
- 6) 同上、巻頭凡例
- 7) 「阪神大水害関連写真」1938 年(2A-2-16-16, 17, 18, 19)
- 8) 「阪神大水害 神戸市内の惨状」1938 年頃(2A-1-1 および 2A-1-2)
- 9) 1938 年 7 月 8 日付『神戸又新日報』
- 10) 「阪神大水害関連写真」1938 年(2A-2-16-8, 9, 10)
- 11) 「昭和十三年七月 阪神沿線魚崎附近水害絵はがき」1938 年(2D-148)

- 12) 「昭和十三年七月 阪神沿線住吉川水害絵はがき」1938 年(2D-47)
- 13) 「泥濘に埋まれるトラック」『昭和十三年七月 神戸地方大水害実況と復興に努むる市民』1938 年(2D-236-12)
- 14) 「泥濘に埋まるトラック」『神戸地方水害実況写真』1938 年(2D-364-1)
- 15) 「泥の中に埋れるトラック」『昭和十三年七月五日 神戸附近大水害の実況写真 第三報』1938 年(2D-262-12)
- 16) 「居留地の濁流(神戸地方水害)」『昭和十三年七月 神戸地方大水害実況と復興に努むる市民』1938 年(2D-236-4)
- 17) 「元居留地伊藤町附近」『昭和 13 年(1938 年)阪神大水害』1938 年頃(2A-1-3-49)
- 18) 逓信省令第二十五號第二十七条(1938/4/1)表面ノ上部又ハ左側部ノ中央ニ「郵便はがき」又ハ之ニ相当スル文字ヲ明瞭ニ記載スルコト
- 19) 「小曾根喜一郎コレクション③絵葉書アルバム」小曾根実氏寄贈、1938 年頃(2B-12-3)
- 20) 「神戸元町通の濁水」『昭和十三年七月五日 神戸附近大水害の実況写真 第三報』1938 年(2D-262-11)
- 21) 毎日フォトバンク「災害(水害)阪神大水害 川からあふれ出た濁流により街は泥で埋め尽くされた」(写真 ID:P20100826dd1dd1phj168000) 22) 「宇治川陸橋に押寄せた倒壊家屋」『昭和十三年七月五日 神戸附近大水害の実況写真 第三報』1938 年(2D-262-15)
- 23) 「山手通の橘橋(神戸市電山手線の陸橋)にせき止められて折り重なった宇治川流域の流失民家や流木」朝日新聞デジタル 写真特集 阪神大水害 80 年【1】水没した神戸市街(http://www.asahi.com/gallery/hanshin_daisuigai1938/vol1/20151107P0631AREG.html)
- 24) 「新湊川の濁流」『昭和十三年七月五日 神戸附近大水害の実況写真 第三報』1938 年(2D-262-13)
- 25) 「天王川の氾濫で水没した湊区下三条町」朝日新聞デジタル、同上(http://www.asahi.com/gallery/hanshin_daisuigai1938/vol1/20151107P0645AREG.html)
- 26) 田邊幹「メディアとしての絵葉書」新潟県立歴史博物館研究紀要 第 3 号 73-83(2002), P81
- 27) 「加納町付近の災害(神戸地方水害)」『〈神戸地方水害〉シリーズ』1938 年(2D-366-1)
- 28) 「昭和 13 年(1938 年)阪神大水害」1938 年(2A-1-3)
- 29) 「阪神大水害関連写真」1938 年(2A-2-16-111)
- 30) 「昭和 13 年 7 月 5 日 大水害写真帳」1938 年(2A-1-29-48)
- 31) 「阪神三宮駅附近の出水」『〈昭和 13 年大水害〉シリーズ』1938 年(2D-234-7)
- 32) 「7 月 8 日 三宮そごう前附近 その 1」『昭和 13 年(1938 年)阪神大水害』1938 年頃(2A-1-3-47)
- 33) 「元町通の浸水(神戸地方水害)」『昭和十三年七月 神戸地方大水害実況と復興に努むる市民』1938 年(2D-236-6)
- 34) 「元町通りの浸水(神戸地方水害)」『〈神戸地方水害〉シリーズ』1938 年(2D-65-6)
- 35) 「減水後の元町通 6 丁目」『昭和 13 年(1938 年)阪神大水害』1938 年頃(2A-1-3-68)

絵葉書にみる生田神社・湊川神社

福井 真奈美

1 はじめに

街の中心部に位置する生田神社と湊川神社は、神戸の名所として知られており、市民はもとより、外国人観光客の参詣も多い。

絵葉書は、私製はがきの使用が認められた1900（明治33）年に誕生した。各地の景勝地を写した絵葉書は観光土産として人気を集めていた。当時の絵葉書は情報を伝えるメディアとしての役割を担っていたが、近年ではその記録性が注目されている¹⁾。ここでは絵葉書を史料とし、生田神社・湊川神社の明治から昭和初期にかけての姿をたどってみる。

2 生田神社について

2-1 生田神社の歴史

生田神社は、創祀より1800年以上と伝えられる歴史ある神社である。創祀については日本書紀にも記されており、また延喜式神名帳に名を残す式内社ともなっている。古代、神領で神社を支えていた家のことを「かんべ」（神戸）といい、神戸の地名は生田神社の「かんべ」に由来すると伝わる。

生田神社は、201年、神功皇后により布引の滝付近にある砂山（いさごやま／現在の丸山）に祀られたことが始まりとされる。799（延暦18）年の大洪水により砂山が崩壊したため、現在の地にうつされたとあり、その様子を物語る伝説には次のように記されている²⁾。

「大洪水で神域が崩れそうになったとき、生田郷の住人であった刀弥七太夫が馳せつけ、濁流の中御神体を背負い（中略）安全な場所を探し歩いていた。生田の森に差し掛かったとき御神体が急に重くなり一歩も進むことができなくなったため御神慮と察しここに鎮座された」

また、『六甲山災害史』には「延暦18年（799）4月9日、山城河内摂津等大洪水あり、西谷山崩れる」との記録が確認できる³⁾。また生田神社が山津波をうけるとも記されている。砂山の南に位置する神戸市立雲中小学校の北西角には「旭の鳥居」と呼ばれる高さ約3mの鳥居がある（写真1、2）。生田神社が砂山に祀られていたころの鳥居ではないかと語られている⁴⁾。

生田の森は、中世に何度も合戦の舞台になっており、境内にもその史跡が多く残されている。「平家物語」や「太平記」、



写真1 昭和4年以前の
朝日の鳥居
(神戸市文書館蔵)

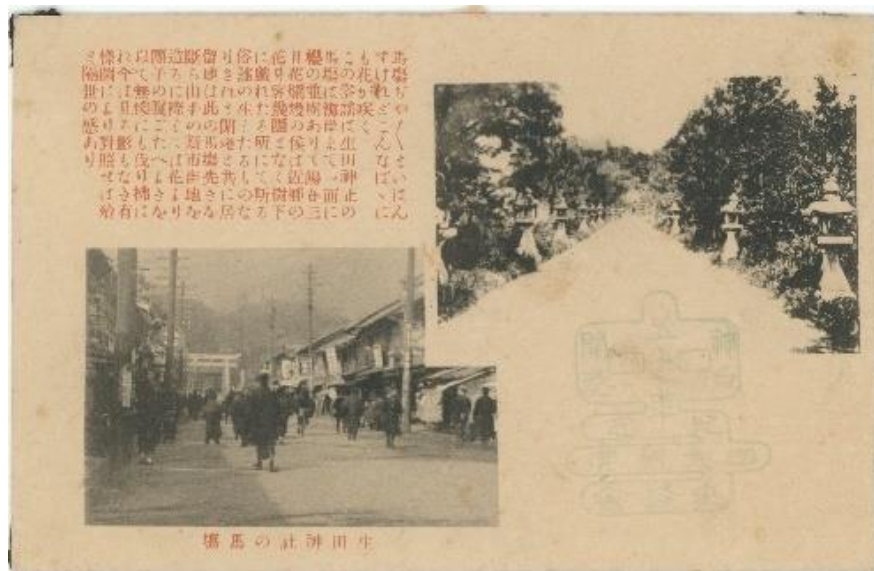


写真2 2025年時点の鳥居

また謡曲などでも当時をうかがい知ることができる。さらに、1635（寛永12）年の炎上からの再建、1945（昭和20）年の神戸大空襲による焼失からの復興や、1995（平成7）年の阪神・淡路大震災での大きな被害からも美しく再建された「甦りの社」としても知られている。

2-2 絵葉書に見る生田神社

No.202-20「生田の馬場」には、明治初期の生田の馬場が見える。当時は本殿より海岸まで800m余りの間、馬場が続いていた。浜辺には石鳥居と高燈籠がたち、灯台の役目をした。沖を通る船は帆をさげ生田の宮を通り過ぎる風習があったとされる⁵⁾。馬場の両側には桜並木があり、石灯籠が並び、桜花爛漫の光景は、桃源郷のようだったと伝えられている。「梅は岡本、桜は生田、松のよいのは湊川」と俗謡に謳われるほどの桜の名所だった⁶⁾。1868（慶応3）年神戸港の開港に伴い、馬場の一部は外国人居留地へと変化した。そして、周辺の都市化が急速に進んだこともあり、馬場の面影は明治年間のうちに消えてしまった。絵葉書左上の文面には、生田の馬場が時代に翻弄された様子がつづられている。



「馬場ぢや馬場ぢやといはんすけれどこなばゝにも花が咲く この俗謡は生田神社の馬場は海岸まで一面に桜の並樹ありて陽春三月花爛漫の候は近郷の花見客幾團となく樹下に戯れたる所にて斯る俗謡の生したるものなりされと開港と共に居留地は此の馬場先きを断ち山手の新市街地を造るに際しては花より團子の腹ごたへよきを以て無惨にも伐り拂はれ今は見る影もなき有様圖により対照せは殆と隔世の感あり」（No.202-20）

No.60-9「IKUTA TEMPLE,KOBE」

生田神社は1896（明治29）年に「官幣中社」となった。しかし、No.60-9の絵葉書にはその社格を示す社標が確認できないことから、1895（明治28）年以前の景観と考えられる。葉書の右端には「前略御免 初航海門司安着三四日之内帰阪」と記され、門司から大阪に送られた葉書とわかる。葉書の左下に「IKUTA TEMPLE,KOBE」と英字表記がされ、外国人参拝者も訪れていたのだろう。



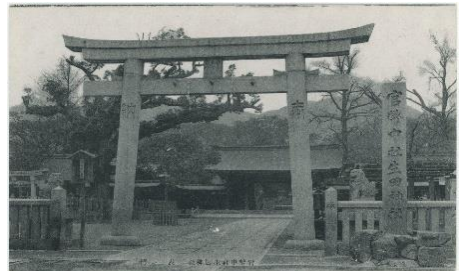
No. 60-17 「官幣中社 生田神社 表門前」

「官幣中社 生田神社」の石柱が見られることから、1896（明治29）年以降の発行と特定できる。鳥居手前に確認できる藤棚は現在の境内には存在しない。葉書中央の参拝印には「官幣中社・生田神社 参拝之章」とあり、社紋の桜がデザインされている。



「官幣中社生田神社」にみる焼失前の社殿

1943（昭和18）年4月の御例祭に合わせて発行された、6枚1セットの絵葉書が残されている（109-1～6）。生田神社略記とともに、桜の社紋が型押しされた袋に納められている。この発行からわずか2年後、1945（昭和20）年の神戸大空襲により社殿すべてが焼失しており、焼失前の姿が残された貴重な絵葉書といえる。



（上）No. 109-1 「官幣中社生田神社 表門」

（下）No.63-47 「神戸名所 官幣中社生田神社」

No. 109-1 「官幣中社生田神社 表門」

焼失後、社殿は1959（昭和34）年に復興されたが、『生田神社復興造営誌』（生田神社復興奉賛会、1959年）では表門としての建築物は確認できない⁷⁾。1974（昭和49）年に楼門が造営されており、表門は再建されなかったと思われる。石造の鳥居は唯一焼失を免れた。手彩色絵葉書では、藤棚の葉が青々と茂っている夏の風景が確認できる（63-47）。日本の風物や文化が写された手彩色絵葉書は、開港後日本文化に触れた外国人の間で流行した⁸⁾。



No.109-2「官幣中社生田神社 本殿並拝殿」

かつての拝殿の姿であるが、焼失後再建された拝殿は「拝殿並脇拝殿」として建築規模が大きくなった。



No.109-3「官幣中社生田神社 行宮所」

行宮所は『生田神社復興造営誌』（生田神社復興奉賛会、1959年）に確認できず、

戦災から再建されなかったことがわかる。

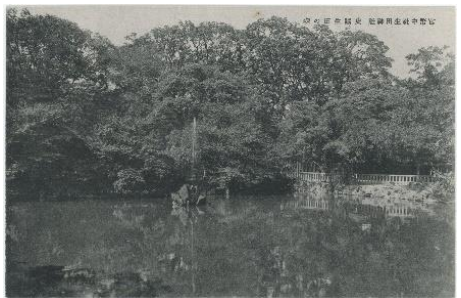
No.109-4「官幣中社生田神社 箆^{えびら}の梅」

源平一の谷合戦の時、生田の森で平家方に囲まれた梶原景季が、咲きほこった梅の一枝を箆（矢を入れる武具）に挿して戦ったことが武士の風流として語り継がれている。源平盛衰記では、「駆くれば花は散りけれども、匂いは袖にぞ残りける。」と風情ある表現で記されている。今も生田神社境内には、紅白二株の老梅があり「箆の梅」と呼ばれている。



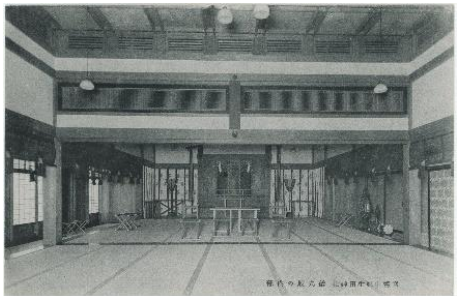
No.109-5「官幣中社生田神社 史跡生田の森」

古代、旧生田川の西側は大森林であったという。生田の森は都にもその名が知られており、清少納言の「枕草子」をはじめ、生田の森を歌枕とした作品も多く残されている。中世には合戦の舞台となり、またその後は戦火や震災にも見舞われてきた。しかし、現在も社殿の北側にある生田の森では推定樹齢600年とも800年とも言われる楠の巨木が生い茂り、かつての面影が残る。



No.109-6「官幣中社生田神社 儀式殿の内部」

焼失後、儀式殿は生田の池のほとりに再建された。結婚式なども執り行われる場所である。神戸大空襲で焼失した社殿は、1959（昭和34）年に造営復興したものの、1995（平成7）年に阪神・淡路大震災が再び社殿を襲った。空襲後に唯一残っていた石の鳥居も倒壊した大きな被害からの復興は、最先端の構造技術と伝統工芸の融合によりわずか1年後の1996（平成8）年に再建された。鳥居は伊勢神宮ゆかりのものが使われた。



2-3 生田の森と競馬場

かつて生田神社の東側に、横浜根岸に次いで 2 番目の古さとなる競馬場が存在した。1868（明治元）年のクリスマスに外国人による初めての競馬会が催されており、その後 1869（明治 2）年に外国人の競馬クラブができ競馬場が設けられた。1872（明治 5）年 10 月には 3 日間にわたり競馬が催されるが、1874（明治 7）年 11 月で競馬場は幕を閉じることとなる。鉄道の開通や人力車の普及、借地料などが理由とされる。

3 湊川神社について

3-1 湊川神社の歴史

湊川神社は、1336（延元元）年湊川の戦いで戦没した楠木正成公を御祭神とし、1872（明治 5）年に創建され「別格官幣社」に列せられている。殉節から約 300 年の間、どのように塚が守られてきたかは詳らかになっていないが、太閤検地によって文禄年間（1592～1596 年）に楠木正成公の墓所であることが明らかとなる。1650（慶安 3）年に尼崎城主 青山幸利氏による修営と五輪塔の建立、また 1692（元禄 5）年には水戸黄門で知られる徳川光圀公により墓碑が建立された。光圀公は大日本史編さんのため、1657（明暦 3）年から各地の調査と資料の収集をした。1692（元禄 5）年の佐々介三郎（助さん）による湊川の調査では楠公史跡と小さな墓所を確認しており、光圀公が墓碑の建立を決めた一因とされている⁹⁾。

1872（明治 5）年には、明治天皇の命により創祀・創建となった。天皇への忠義に殉じた正成公を祀る神社を創建することは、新政府の存立基盤を強固にするためだったとも言われている¹⁰⁾。政府は、1871（明治 4）年に造営事業全般を兵庫県に委任しており、神社は住民の勤労奉仕で創建された。神社境内となる水田に砂を運ぶ「砂持ち」行事が近村の人たちによって行われ、その埋立てには湊川川床の砂が使われたとの記録が残る¹¹⁾。それによると創建後の 1873（明治 6）年には境内での建屋営業が認められており、ぜんざい・蒲鉾屋・仕立屋・竹細工、寄席や芝居小屋が賑わっていた様子もうかがえる。地元では「楠公さん」の愛称で親しまれている。

3-2 絵葉書に見る湊川神社

No.170-3「神戸 別格官幣社湊川神社の大鳥居（日本一）」と No.168-9「神戸名所 別格官幣社湊川神社」には、大鳥居が見られる。これは、1937（昭和 12）年 12 月に建立され、翌 1938（昭和 13）年 8 月に崩壊、わずか 8 か月間だけ存在した。表門の前に建立された大鳥居は、楠木正成公の血脈と伝わる山下太郎氏に寄進されており、高さ四丈四寸五分（約 12m）は、石鳥居として無比の大きさと称されている。

また、『湊川神社六十年史 本篇』（藤巻正之、1939 年）には「図らずも、翌 13 年 8 月、神戸地方大水害直後崩壊を見たので一応撤去、目下良材をえらび再建の準備を進めつつあり、再び御社頭に大鳥居の偉観を仰ぐの日近きにある」と記



（上）No.170-3

（下）No.168-9

されている¹²⁾。現在表門前に鳥居はなく、崩壊した大鳥居の一部が社号標となり残されている。

No.72-4「湊川神社・神戸市役所」

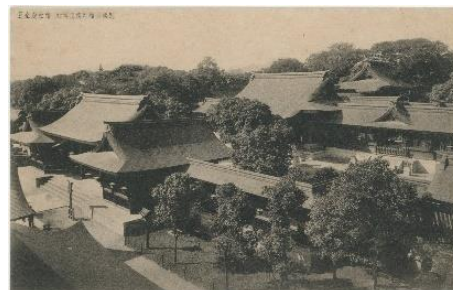
1930(昭和5)年に神戸市役所が発行した観艦式記念絵葉書である。神戸港で観艦式が行われるのは、1890(明治23)年を初回とし4度目で、艦艇161隻の参加があったという。この観艦式を記念して神戸市は開港博覧会を開催しており、150万人の観衆が訪れた¹³⁾。「昭和五年特別大演習観艦式 昭和5年10月26日」の記念スタンプが押されている。



No.114-3「別格官幣社湊川神社 御社殿全景」

No.114-1~6は6枚1セットで袋に収められている。

湊川神社の社殿は1934(昭和9)年の大改修後、1945(昭和20)年の神戸大空襲で焼失した。絵葉書には空襲に遭う前の姿が残る。焼失した社殿は、1952(昭和27)年に鉄筋コンクリート造りで再建されており、1995(平成7)年の阪神・淡路大震災では大きな被害を免れた。権現造りに似た神社建築様式となっている¹⁴⁾。



No.174-3「神戸湊川神社 大楠公石碑 徳川光圀卿建設」

No.114-1「別格官幣社湊川神社 御墓所」

また、No.174-3に見られるように、1692(元禄5)年に水戸光圀公の自筆による「嗚呼忠臣楠子之墓」の墓碑を建立、裏面には明の遺臣 朱舜水の正成公を讃える文が刻まれている。

1920(大正9)年の神戸市都市計画では、墓所(No.114-1)の区域に当たる神社東南角地を切取る案が出たが、神社側の反対意見具申により撤回された¹⁵⁾。



No.114-2「別格官幣社湊川神社 御殉節遺跡」

1336（延元元）年、足利尊氏の大軍と激戦となったが衆寡敵せずと判断し、弟の正季卿と共に自決した場所とされる。本殿の北西に位置しており、境内の中で最も高所で樹木が繁茂するこの場所は「尊厳な地」とされる¹⁶⁾。また1937（昭和12）年の大改修の際に、拝殿の西側に新たに拝所を設け遙拝できるように一新された。



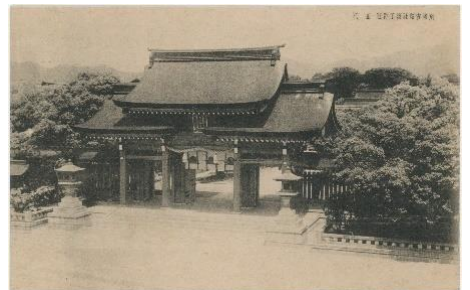
No.114-4「別格官幣社湊川神社 拝殿」

『湊川神社六十年史 本篇』には、1939（昭和14）年4月の主要建造物に「拝殿」の記載が見られる。空襲による焼失以前は拝殿として独立した建造物があったことの記録であり、絵葉書はその姿を留めているといえる。再建された社殿は、本殿と拝殿が大屋根で覆われ一つの建造物となっており、現在は拝殿としての独立した建造物は見られない。



No.114-5「別格官幣社湊川神社 正門」

1934（昭和9）年の大改修において、建造物の大部分が一新されたが、正門は創建当初の面影を残したままとなっていた。1942（昭和17）年、楠木同族会長 山下太郎氏により正門が新築寄進されており、絵葉書に写るのは寄進された正門と推察される¹⁷⁾。



No.114-6「別格官幣社湊川神社 祝詞舎中門」

『湊川神社六十年史 本篇』では、1921（大正10）年6月に記された社殿その他建造物群に「祝詞舎中門」の記載は見られないが、1934年発行の『別格官幣社 湊川神社 御改修記念写真帖』では「祝詞舎中門」の姿が確認され、1935（大正10）年以降に造営されたことがわかる¹⁸⁾。

祝詞舎中門は本殿と拝殿の間に配置されたが、焼失後の再建では本殿と拝殿が一つの建造物になったため再建されなかったと考えられる。絵葉書は焼失前の姿を残している。



3-3 楠公さんの水族館

かつて、湊川神社の境内には水族館があった。神戸市には、歴史的にいくつもの水族館が設けられ、場所も移り変わってきた（表1）。

表1 神戸市内の水族館の移り変わり

名称	年代	場所	関連事項
和田岬水族放養場	1895（明治28）年	和田岬遊園地 「和楽園」	第4回内国勸業博覧会
和田岬水族館	1897（明治30）年	和楽園	第2回大日本水産博覧会、 日本初の水族館
「楠公さんの水族館」 （写真3）	1902（明治35）年～ 1910（明治43）年	湊川神社境内	和田岬水族館を移築
湊川水族館 （No.196-14）	1930（昭和5）年～ 1943（昭和18）年	湊川公園	観艦式記念神戸海港博覧会、 神戸市水産会の開設
神戸市立須磨水族館	1957（昭和32）年～	須磨区若宮町	
神戸市立須磨海浜水族園	1987（昭和62）年～ 2023（令和5）年	須磨区若宮町	須磨水族館のリニューアル
神戸須磨シーワールド	2024（令和6）年～	須磨区若宮町	水族館の民営化

湊川神社境内にあった、「楠公さんの水族館」は、1897（明治30）年の第2回大日本水産博覧会で設置された和田岬水族館を移築して生まれた。博覧会にあわせて開設した和田岬水族館は日本初の水族館であったが、来館者にとって地理的に不便であったために、博覧会終了後、移転建築の計画地を湊川神社境内に求めたという¹⁹⁾。水族館は、外壁にアーチがデザインされた洋風の建築になっていた（写真3）。館内は大小14からなる魚類の水槽があり、中央スペースには2つのジオラマが設置されていたとの記録がある²⁰⁾。立地は現在の宝物館が建つあたりとされ、約8年間市民に親しまれたが、経営が困難になったことを理由に、1910（明治43）年2月に閉館した。

No.196-14は「湊川水族館」の场景を伝える絵葉書である。湊川水族館は、1930（昭和5）年に開催された神戸海港博覧会にあわせて、神戸市水産会によって湊川公園に開設されたもので、水族館と海洋館に分かれていた。



写真3 楠公さんの水族館
（荒尾親成『ふるさとの思い出写真集
明治大正昭和 神戸』1979年、P.9）



No.196-14「湊川水族館」
（「神戸沖観艦式記念海港博覧会」神戸市文書館所蔵）

4.おわりに

生田神社の歴史は古く、創始については日本書紀にも記されている。砂山から現在の地に移ったころの生田の森は、清少納言の「枕草子」や和歌の題材となり、また古戦場であることを伝える物語や謡曲など、多くの文学作品が残されている。社殿の北側にある生田の森には今でも楠の巨木が生い茂り、かつての面影を残す。

湊川神社の創建は明治に入ってからになる。正成公を祀る神社を創建することは、新政府の基盤を強固にするためだったとも言われている。創建後の境内では、多くの店や芝居小屋が立ち並び賑わいをみせていた。観艦式の地に湊川が選ばれたことや水族館の移築、また境内の砂持ち行事や建屋営業など、行政や近隣住人との関りが深い。

生田神社・湊川神社は異なる歴史と意義を持つ。時代の流れに沿い、また戦災や震災からの復興を遂げてきた両社は、現在も神戸を代表する名所として多くの参拝者が訪れている。

注

- 1) 和歌山大学紀州経済史文化史研究所『絵葉書 そのメディア性と記録性』和歌山大学紀州経済史文化史研究所、2013 年
- 2) 太田敏三『葦合文化の源泉 布引瀧と周辺史跡』葦合史蹟頒布の会、1952 年
- 3) 兵庫県治山林道協会『六甲山災害史』兵庫県治山林道協会、1998 年
- 4) 葦合区役所広報相談課編『葦合ものがたりー郷土のおいたちー』葦合区役所、1977 年。なお、この伝承は諸説ある。
- 5) 生田区振興連絡協議会『生田のいまむかし』生田区振興連絡協議会、1975 年
- 6) 生田神社編『生田神社史』国書刊行会、2007 年
- 7) 生田神社復興奉賛会編『生田神社復興造営誌』生田神社々務所、1959 年
- 8) 水嶋彩乃ほか編『Colorful JAPAN 幕末・明治 手彩色写真への旅』神戸市立博物館、2024 年
- 9) 楠本利夫「『湊川神社物語』湊川神社から見た神戸の近現代」湊川神社、2011 年
- 10) 同前
- 11) 西山幸夫「湊川神社境内変遷の記」『歴史と神戸』14 号、神戸史学会、1964 年
- 12) 藤巻正之編『湊川神社六十年史』湊川神社、1939 年
- 13) 神戸博覧会協会編『観艦式記念 海港博覧会誌』神戸博覧会協会、1931 年
- 14) 湊川神社「神戸と楠公さん」編集委員会編『神戸と楠公さん』神戸新聞総合出版センター、2006 年
- 15) 注 12 に同じ
- 16) 同前
- 17) 森田康之助『湊川神社史 下巻 鎮座篇』湊川神社社務所、1987 年
- 18) 湊川神社『別格官幣社湊川神社御改修記念写真帖』湊川神社、1934 年
- 19) 注 11 に同じ
- 20) 川辺賢武「神戸の水族館のうつりかわり」『歴史と神戸』14 号、神戸史学会、1964 年

絵葉書にみる須磨の風景・史跡

中村 憲司

はじめに—須磨と海—

須磨の地名はスミの転化と考えられている。つまり古代の行政区画である畿内、摂津国の西の隅にあることがその由来とみられる¹⁾。「須磨の浦」とも呼ばれて、海を臨む美しい眺望は古くから文人たちの憧れであった。神戸市の発展・拡大によって須磨の地にも鉄道が敷設され、住民と行楽客が急増する。それにともなって須磨の地は今日知られるような近代的な街並みへと変貌した。ここでは、須磨の海とその周辺を写した戦前の絵葉書を紹介しながら、当地の歴史的変遷をみていきたい。

Ⅰ 須磨の海と海上交通

図1は須磨海岸を通る汽車と海岸の風景である。現代のように護岸工事がされておらず、かつては砂浜だった様子が窺える。都市開発が進み、護岸工事を施される前の須磨海岸の姿が記録されている。本章では、近代化される前の須磨の海の風景を紹介する。

○須磨の海岸・松林

図2は現在の須磨海浜公園付近と思われる。具体的な時期は不明だが、護岸工事が進む前の、収穫物を荷下ろししているのどかな海辺の風景であろう。砂浜に乗り上げた小さな漁船が漁師町の須磨を伝えている。



図1 須磨海浜 (No.39-7)



図2 摂津須磨の浦 (No.14-7)

「須磨浦の浦海浜の眺望」と題された彩色絵葉書(図3)は、今の須磨浦公園の海岸を写したものである。洋装化が進んだ観光客の服装からみて、昭和初期の撮影かと思われる。この時期も帆船が現役で活躍し、漁船らしき親船から小船に荷を積み替えて陸揚げの準備をしていたことがわかる。松の枝越しにみえる海と、沖合で帆を畳んで浮かぶ帆船が風情を醸している。

須磨浦公園の位置は鉢伏山・鉄拐山の麓にあたり、山を含めて24万坪におよぶ広大な御料地(皇室林野管理局)であったが、1924(大正13)年に神戸市へ払い下げられた²⁾。昭和天皇の

御即位記念事業として造成され、1935（昭和10）年8月から一般開放されている。

図4は舞子の料亭萬亀楼（明治27年創業）から淡路島方面を望む眺望である。汽船はほとんど見えず、依然として多くの帆船が行き交う様子が伺える一枚である。須磨から明石にかけての海には、多くの帆船が通過していた。



図3 須磨の浦海浜の眺望
(No.249-3)

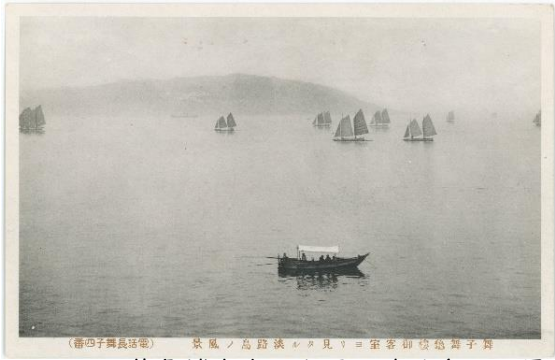


図4 萬亀楼客室から見た淡路島の風景
(No.20-8)

○垂水・平磯灯標

近代に入って海を往来する船舶が増加し、それにともなって暗礁で船の難破を防ぐ灯台や灯標が設置された。陸地に設置したものを灯台、海上に設置したものを灯標と呼ぶ。

図5にみえる立派な灯標は、垂水の海に浮かぶ平磯灯標である。この灯標は、塩屋と垂水を舞台にしたサマセット・モームの短編小説「困ったときの友」に登場する「信号浮標」にあたると考えられている³⁾。瀬戸内の海流が明石海峡を通過することで生まれる、厳しい潮の流れが物語の結末に深く関わっているが、それは須磨の海が豊かな漁場となる地理的要因でもあった。



図5 垂水灯台と舞子ヶ浜の眺望 (No.19-8)

○一ノ谷古戦場

畿内の入り口にあたる神戸の海岸は、陸の山陽道・西国街道、そして瀬戸内海交通が兵庫の津で結ばれる交通の要であった。そのため、須磨の地でも有名な源平の合戦が繰り広げられた。図6は源平合戦の故地を写した絵葉書である。もっとも、源義経率いる源氏方が平家方と戦った一ノ谷合戦の場所については古くから諸説ある⁴⁾。須磨浦公園の東側、一ノ谷町のあたりに平家の本陣があったという伝承があり、「戦の浜」と呼ばれた観光地となった。

図7は一ノ谷の山腹を写したものであろう。義経ら源氏の軍勢が歩を進めた当時を彷彿とさせる、鬱蒼とした細道であり、並木の向こうにかすかに海を覗くことができる。

1908（明治41）年に兵庫電気軌道株式会社（現在の山陽電気鉄道）によって神戸・明石間の電気鉄道敷設が始まり、1910（明治43）年3月に兵庫・須磨間の運輸営業が開業した。もっとも、当初の兵庫電軌は路面電車であり、当時の駅は長田・西代・板宿・大手・月見山・須磨寺・須磨の8駅であった。1912（明治45）年7月に須磨・一ノ谷間が開業し、一ノ谷停留所の西に1913（大正2）年5月以降、敦盛塚（三ノ谷停留所、現在の須磨浦公園駅）、東塩屋、塩屋とつながって

いき、1917(大正6)年4月には滝の茶屋、東垂水、垂水、そして電鉄明石までの停留所が開業する⁵⁾。



図6 須磨の浦(戦の浜)(No.14-7)



図7 須磨一ノ谷(古戦場)
(No.60-3)

2 保養地としての須磨

官営鉄道が1888(明治21)年に須磨駅を設置し、兵庫電気軌道株式会社が1910(明治43)年に兵庫・須磨間の運輸営業を開始するなどの鉄道の開通にともなって、大阪から須磨へのアクセスが容易になった。そして、気候に恵まれた須磨の地に数多くの名士の邸宅・別荘が設けられた。とくに第一次世界大戦の好景気の影響を受け、大正時代には邸宅が急増した。藤田伝次郎邸、住友家須磨別邸、大谷家月見山別邸、川崎正蔵、川西清兵衛など名士たちの別荘は、保養目的にとどまらず、社交・外交の舞台としても重要な役割を果たした。

建物の多くは戦災、そして阪神・淡路大震災で失われ、その後もヴォーリス設計の旧室谷家住宅のように売却されて取り壊されたものがあるが、旧西尾類蔵邸をはじめ数件が当時の豪華な壮観をとどめている。なお、戦災で失われた旧住友家須磨別邸の広大な跡地は神戸市に寄付され、1951(昭和26)年完成の須磨海浜公園の敷地となった。

○有栖川宮別邸

神戸近郊が保養地として有名になる嚆矢の一つが、舞子の有栖川宮熾仁(たるひと)親王の邸宅であった(図8・9)。東征大総督として江戸幕府を倒した熾仁親王は、のちに避暑で当地を訪れた。舞子柏山の地を気に入った親王は、大島作郎邸を改築して別荘を築いた。日清戦争のさなかに広島大本営で病を得て、1894(明治28)年にこの別邸で療養中に薨去した。しかし、熾仁親王



図8 住友家舞子別邸(No.21-1)



図9 住友家舞子別邸(No.21-2)

亡き後も弟の威仁親王、そして明治天皇の数度の行幸を得ている⁶⁾。当地は1917(大正6)年に住友家へ下賜され、同家の迎賓館として活用された。その後、米軍やオリエンタルホテルなどの手を経たのち、神戸市が買収して1978(昭和45)年に鉄筋コンクリート造りで建て替えられた。今はシーサイドホテル舞子ビラ神戸として営業している。

○須磨浦療病院

温暖な景勝地である須磨の地は、療養地としても愛された。1889(明治22)年8月に設立された須磨浦療病院は日本初の結核療養所であり、療養棟が松林の中に建っていた。図10・11は、第二号病棟と本館玄関である。明治半ばに設立された保養院は、三ノ谷の御用林を借り上げたもので、現在の須磨浦公園の高台に位置した。

1895(明治28)年7月、従軍記者の勤めを終えて帰国した正岡子規は、須磨の地で1ヶ月ほど療養した⁷⁾。旅館の須磨保養院(のちの須磨花壇)から隣接する須磨浦療病院へ通った。鶴崎平三郎の治療を受けながら療養して、8月末に松山へ帰郷した。

子規は当地の思い出を小説『月見草』に記し、又「ことづけよ須磨の浦曲に昼寝すと」・「松越しに白帆過ぎゆく保養院」・「ほととぎす啼くやニの谷三の谷」などの俳句を詠んだ。なお、鶴崎は1909(明治42)年、垂水歌敷山で療養中の有栖川宮威仁(たけひと)親王主治医も務めた人物であった⁸⁾。



図10 須磨浦療病院第二号病棟 (No.21-1)



図11 須磨浦療病院本館玄関 (No.21-2)

○武庫離宮

月見山は東須磨・西須磨の境にある高台である。伯爵大谷光瑞の月見山別邸を1908(明治41)年に宮内省が買い上げて武庫離宮となった。1912(明治45)年5月に起工し、1914(大正3)年2月に完成した。「武庫離宮」の名称は、1920(大正9)年に須磨町が神戸市に編入される前は兵庫県武庫郡であったことにちなむ。大正天皇皇后両陛下、満州国皇帝溥儀、のちに昭和天皇も訪問した。しかし離宮は1945(昭和20)年6月の空襲で被災し、中門や潮見台などのごく一部を残してほとんどの建物が失われた。現在の須磨離宮公園は、昭和天皇御成婚記念事業として1967(昭和42)年に整備されたフランス式の庭園である。

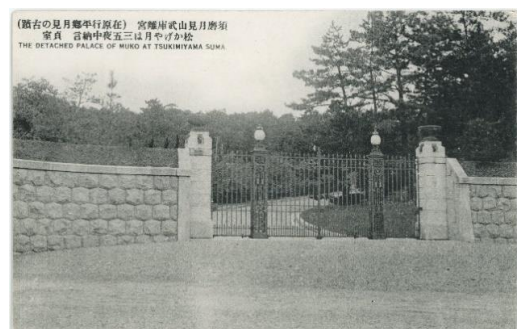


図12 武庫離宮正門 (No.15-4)

さて、図 12 は武庫離宮の正門を写したものである。門の形状が現在と若干異なり、石柱に鉄柱を並べる意匠であった。門扉は変わったが石柱や石垣は当時のまま須磨離宮公園正門として使用されている。当絵葉書と同じシリーズに大正末年の須磨寺、また 1922(大正 11) 年完成の栄光教会の写真を掲載しており、離宮正門も大正末以降とみられる。なお、月見山別邸の買い上げは、当時の宮内大臣田中光顕が辞任に追い込まれる一因となったが、光瑞は買い上げの下附金を利用して、武庫郡岡本に新たな別邸二楽荘を築いた⁹⁾。

3 鉄道交通と須磨

1889(明治 22) 年に須磨村が成立して、1912(明治 45) 年に須磨町となり、1920(大正 9) 年 4 月 1 日に神戸市へと編入された。しかし、市への合併条件に、市電延長と離宮通―須磨浦通四丁目間の開通があった。1925(大正 14) 年から 1926(大正 15) 年にかけて須磨線が延長され、尻池から鷹取、離宮道へと延びた。1927(昭和 2) 年に須磨浦 4 丁目、1937(昭和 12) 年には同 5 丁目まで延長され、これによって須磨線が完成する。同年に大橋 9 丁目から北へ向かい、板宿を結ぶ板宿線も開通している。このような鉄道路線の拡大は須磨のまちの発展に寄与した。

○絵葉書に映る車両

1910(明治 43) 年 3 月に兵庫電気軌道株式会社(のちの山陽電気鉄道)が営業を開始し、官営鉄道(現在の JR 山陽本線)とともに須磨海岸を併走する光景が生まれた。

図 13 は兵庫電軌の敦盛塚停留所付近の風景で、省線と兵庫電軌が併走する様子を捉えている。兵庫電軌の車両の後ろに見える階段とほぼ同じものが現地に残っており、現在の須磨海づり公園の付近とわかる。

手前を走る山陽列車(省鉄)を拡大すると、18968 番というナンバープレートがかすかに読みとれる。18900 形(後に C51 型と呼称)は大型旅客で長距離に向くテンダー式蒸気機関車であり、1919(大正 8)年から 1928(昭和 3)年にかけて製造された。1928 年 10 月に C51 から始まる車両称号へと改正されたことから¹⁰⁾、この写真は 1928 年以前の撮影と考えられる。



図 13 須磨海浜通過の山陽列車 (No.83-1)

○行楽地(海水浴場)

1912(明治 45) 年 7 月に須磨～一ノ谷間、1913(大正 2) 年 5 月に一ノ谷～塩屋間が開業し¹¹⁾、神戸市の工業化と鉄道化が進行した結果、海水の汚染された敏馬や東明から多くの海水浴客が移ってきた。

図 14 は神戸の風景版画家・川西英の『神戸百景』(1935 年)の第 100 番「須磨海水浴」の一部を絵葉書にしたものである。砂浜に海の家が立ち並び、海の中にそびえ立つ櫓を海水浴客が利用する様子が描かれている。

この櫓は図 15 でも海中に2つ写り込んでいる。狭い砂浜にパラソルをさした海水客が、ところ狭しと居並んでおり、現代と変わらない夏の賑わいが窺える。



図 14 川西英「須磨海水浴」(No.103-2)



図 15 須磨の海水浴 (No.144-3)

○行楽地(敦盛塚)

鉢伏山と海に挟まれた須磨浦公園内には史跡が点在する。かつては西国街道沿いにあった敦盛塚には、古くから往来する人々が供養していた¹²⁾。図 16 にみる敦盛塚は現在とは異なり、茅葺の屋根で覆われていたようだ。『平家物語』の悲哀と相まって観光地として注目され、このような絵葉書が発行されたのだろうか。



図 16 摂州一の谷敦盛塚 (No.14-10)

○行楽地(須磨寺遊園地)

1913(大正 2)年に兵庫電軌は須磨寺遊園地の造成に乗り出した。須磨寺の住職長原蜜浄は寺の再興を目的として、境内に桜の名所をつくる計画を立てた。有志に桜の寄付を呼び掛けた結果、千本以上の桜を植えることに成功し、「新吉野」と名付けた新しい名所が生まれた。兵庫電軌は須磨寺と提携して園内の池にボートを浮かべ、延命軒 宴会場 遊園地や動物園・人形館などの遊興施設を揃え、鉄道が多くの見物客を運んだ¹³⁾。

次の 2 点は須磨寺に併設された須磨寺遊園地の絵葉書である。図 17 は手前に動物小屋らしき施設、池の対岸にはビール会社のロゴがみえ、図 18 には大池と歓楽場が写る。両絵葉書にみえる大池の一部は埋め立てられ、須磨寺公園として整備されて今日にいたる。



図 17 須磨寺遊園地 (No.14-8)



図 18 遊園地大池 (No.17-1)

○須磨天神橋の開通

図 19 には須磨天神橋と市電が写る。この天神橋は 1927 (昭和2) 年の竣功で、走行中の「市電 546」という番号の車両が見える。車両番号 500 型は大正末から昭和初期に登場したことから、開通間もない天神橋の風景を写した昭和 2 年頃の写真であろう。同年 3 月 1 日に離宮道停留場～須磨浦通 4 丁目停留場間が開業している¹⁴⁾。須磨から先へは兵庫電気軌道もしくは国鉄山陽本線が市民の脚となった。

図 20 の松林を走る兵庫電軌の車両は、側面に降車口が 3 個あることから、1921 (大正 10) 年に導入された兵庫電気軌道 36 型とみられる。兵庫電軌は 1927 年に宇治川電気株式会社に合併され、のちに山陽電鉄となった。



図 19 須磨天神橋 (No.15-6)



図 20 境浜付近の街道筋 (No.15-

図 21 も同じ 36 型で、先頭の丸いカーブを描く屋根が特徴的な兵庫電軌の路面電車の海側を、省線の線路が走る。一ノ谷停留所西側附近から今の国道 2 号線の道路を写したもので、省線の電車運転は 1934 (昭和 9) 年 9 月に開始した。線路上に架線がないことから、それ以前の撮影とわかる。右下に「一ノ谷鯖大師・上半丁」と記した道標がみえる。現在の国道 2 号線沿い、須磨浦公園の東にある旧一ノ谷プラザ (市バス運転士詰所) の付近にあたり、当時この石柱から半町ほど山側へ上ったところに一ノ谷鯖大師 (貞照寺) があった¹⁵⁾。



図 21 一の谷古戦場 戦の浜 (No.15-2)

おわりに

須磨の風景が急激に変容した大きな要因は鉄道であった。かつてののどかな漁場は、省線・兵庫電軌・市電の敷設によって人の移動が飛躍的に至便になったこと、保養地・観光資源として着目されたことで姿を変えた。海を中心とした須磨の生活環境には、都市化の進行による人口増と別荘地の開拓、鉄道会社が沿線での事業拡大に力を入れ、海水浴場や遊園地を運営したことが影響していた。今回紹介した絵葉書は須磨の歴史的風景とその変遷を知るうえで興味深い資料であると言える。

注

- 1) 仲彦三郎編『西摂大観』内外書房、復刊 1965 年、初出 1911 年
- 2) 山陽電気鉄道株式会社社史編集委員会編『山陽電気鉄道 65 年史』山陽電気鉄道株式会社、1972 年
- 3) サマセット・モーム著、龍口直太郎訳『コスモポリタンス』筑摩書房、1994 年
- 4) ビジュアルブックス編集委員会編『古代史の舞台を行く』神戸新聞総合出版センター、2005 年
- 5) 注 2 に同じ
- 6) 神戸女子大学史学研究室編『須磨の歴史』神戸女子大学史学研究室、1990 年
- 7) 鶴崎範太郎・鶴崎隆一『須磨浦病院創立 100 年』須磨浦病院、1989 年
- 8) 注 7 に同じ
- 9) 注 6 に同じ
- 10) 日本国有鉄道編『鉄道辞典』日本国有鉄道、1958 年
- 11) 注 2 に同じ
- 12) 秦石田編『播州名所巡覧図絵』（1804 年）に、大五輪石塔として紹介される。
- 13) 和田克己編『むかしの神戸 絵はがきに見る明治・大正・昭和初期』神戸新聞総合出版センター、1997 年
- 14) 神戸市交通局編『“さよなら神戸市電” 写真でつづる 54 年の生涯』神戸市交通局、1971 年
- 15) 注 6 に同じ

絵葉書にみる有馬温泉の観光地化

近本 正子

はじめに

当館では「有馬」に関する絵葉書を複数所蔵している。有馬町は日本最古の温泉地の一つといわれ¹⁾、太閤秀吉ゆかりの地として有名な有馬温泉を中心とした地域である。六甲山北側の北区有馬町に位置する有馬温泉は、関西の「奥座敷」として親しまれている。歴史が深く見どころの多い有馬町には、「温泉寺」「極楽寺」「念仏寺」「湯泉神社」などの由緒ある寺社があり²⁾、多くの観光客が訪れている。絵葉書から読み取れる情報は多くはなく、資料の作製時期や伝来などが不明なものも多いが、その被写体を通して、「湯治場」から「観光地」へと変化を遂げてきた近現代の有馬の姿と交通の発達をみることができる。

Ⅰ 絵葉書の題材としての有馬

(Ⅰ) 有馬温泉の歴史

有馬温泉には神代の昔、「三羽の鳥」が湧き出る湯に傷を浸して癒すのを見た大己貴命・少彦名命おのおのむちのみこと
すくなひこなのみことにより発見された温泉といわれている³⁾。舒明天皇や孝徳天皇が御幸したと『日本書記』に記されている由緒ある温泉である。724(神亀元)年、行基が薬師如来のお告げにより有馬の地に一寺三院を建立するとともに、温泉を掘削・再興し、大いに繁栄したといわれている⁴⁾。しかしその後、六甲山の水害により長きにわたり、衰退する。1191(建久二)年、奈良吉野の僧である仁西上人が、熊野権現のお告げにより有馬に来て温泉を修築し、薬師堂を再興し、薬師如来の十二神将にちなむ十二の坊舎を設けた⁵⁾。それ以後有馬温泉は賑わいを取り戻した。現在有馬温泉の旅館に坊の名が多いのはこのことに由来している。

①(有馬名勝)薬師寺本堂 (No.8-10)

図1の絵葉書には、「Arima Meisho」「(有馬名勝)薬師寺本堂」と書かれている。行基が創建したという温泉寺は、当館所蔵の絵葉書には、「薬師寺本堂」や「温泉寺薬師堂」などの解説文が付けられている。



図1(有馬名勝)薬師寺本堂

②(有馬名勝)秀吉公袖石 (No.8-1)

当館所蔵の有馬の絵葉書には「秀吉公袖石」「瑞宝寺境内の奇岩豊公基盤の石」を題材としたものがあり、有馬温泉を愛した豊臣秀吉が幾度となく訪れ、関係が深かったことがうかがえる。

江戸時代日本の温泉地を「東之方」と「西之方」に分け、相撲の番付に見立てた「諸国温泉効能鑑」に、「東の大関」は草津温泉、「西の大関」には有馬温泉が位置付けら

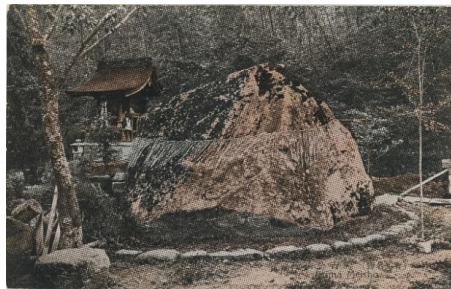


図2(有馬名勝)秀吉公袖石

れている⁶⁾。このことから有馬温泉が高い人気を誇っていたことがわかる。

(2) 有馬温泉泉源と開発

有馬温泉には狭い範囲に泉質が湧出し、温度も高温から低温までさまざまで「金泉」「銀泉」「炭酸泉」「ラジウム泉」の四種類がある。

「金泉」は、鉄を含む塩分濃度の濃い温泉で、泉質は「強塩化物泉（含鉄・ナトリウム塩化物強塩高温泉）」である。非常に高温で、湧出時は無色透明であるが、後に鉄が酸化し赤褐色に変化する。有馬温泉を代表する温泉である。

「銀泉」は鉄をほとんど含まず、金泉のように赤褐色に変色しない。比較的中温度のものが多く、泉質は「塩化物泉（ナトリウム塩化物中温泉）・炭酸水素塩泉」である。

「炭酸泉」は無色透明の低温で、泉質は「単純二酸化炭素」である。

「ラジウム泉」も無色透明で、三〇度前後の比較的低温の温泉で、泉質は「放射能泉」である。

神戸市が所有・管理しているのは、七泉源で、いわゆる「金泉」は「天神泉源」「御所泉源」「極楽泉源」「妬泉源」の四泉源である。神戸市と神戸電鉄が出資している株式会社有馬温泉企業が所有・管理しているのは、「金泉」の「有明一号泉・有明二号泉」の二ヶ所である。これらの「金泉」の泉源のうち、有明一号泉以外は、戦後開発された。観光資源の復興・開発を緊急の課題として有馬温泉の観光復興・開発を進め⁷⁾、1949（昭和24）年に天神温泉や御所温泉などの掘削に成功し、今まで外湯しかなかった有馬温泉に「旅館の内湯」が誕生した⁸⁾。

(3) 有馬温泉の観光地化への歩みと「森林公園ト有馬温泉風景利用策」

③ 摂津有馬ラジウム温泉 (No.305-14)

図3の絵葉書はインドサラセン近世様式を取り入れた洋館ラジウム温泉である。絵葉書の右上部分に「Arima Spa. 有馬名所」、右下部分に「ラジウム温泉浴場」と書かれている。瑞宝寺跡奥の六甲川の川岸に湧出する源泉から温泉を引き、1915（大正4）年に有馬鉄道株式会社（1919年国有、1943年廃線）の「有馬―三田」間の開通と同時に有馬駅の北に建設・開業された。

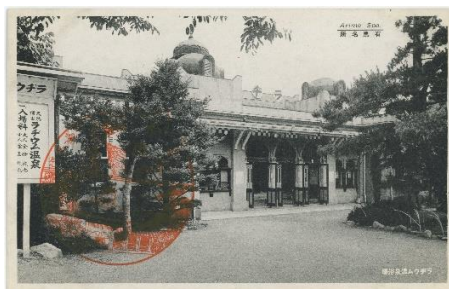


図3 摂津有馬ラジウム温泉

しかし1938（昭和13）年7月の阪神大水害で、ラジウム温泉は流出した。2001（平成13）年に炭酸泉とラジウム温泉を混ぜ合わせて、「銀の湯」として蘇り、親しまれている⁹⁾。

有馬温泉のラジウム温泉や天然の資源を活用し、観光地へと導いた人物の一人に本多静六博士がいる。本多静六博士は日本の林学者で「公園の父」として知られ、博士は神戸市でも重要な役割を果たした。特に六甲山の植林事業において、土砂災害の防止にも貢献し、その功績が際立つ。博士は有馬町長・有井武之介と有馬鉄道会社社長・山脇延吉の協力のもと有馬温泉の調査をし、観光地としての活性化に尽力している。

当館所蔵の本多静六博士による講話『森林公園ト有馬温泉風景利用策（大正5年11月14日有馬町役場ニ於テ）』（本多静六講話、有馬町役場、1916年12月）には本多静六博士の有馬町役場での講演内容が記されている。

此有馬附近一帯ノ地ノ如キ阪神両市ノ如キ大都会ニ接近シ天然ノ山水風景ニ富ミ加フルニ最モ古ク最モ有名ナル温泉デ太閤肥大ニハ二千戸（今ハ三百戸）アリシト稱セラルル程繁盛セル歴史的温泉ト豊富ナル「ラジウム」鉱泉ヲ有スル点ニ於テ此ノ天然ノ恩恵ヲ利用スルノ方策ヲ講ゼザルハ實ニ有馬町並ニ其附近村落ノ不利益ナルノミナラズ延イテ兵庫県並ニ大日本帝国ノ不利益デアリマス

有馬地域の風景や温泉などの「天然の恩恵」を利用する方策を講じないことは日本にとって不利益だと講演会で語っている。そしてそのためには、交通の発達が重要であると具体的な方策を述べている。また観光プランをたて、一日・二日・三日かけて巡るルートも示している。その他新道、新設備、眺望と植物、街の整備、保勝会についても提案している。

「欧米ニハナイ幸ニ有馬ニハ附近ニ天然ノ阪道ガ沢山アルカラ温泉ハ朝トタニニ度クライニシテアトハ山巡リヲナシテ真ニ健康ヲ増進セシムルヨウ指導シ設備スル必要ガアル今回ノ風景利用策ノ諸設備ニハコノ点ニオイテモマタ有益ナルヲ信ズルモノナリ」と結んでいる¹⁰⁾。

2 観光促進のための絵葉書

1) 絵葉書にみる有馬の名所・名勝

有馬には温泉地として発展した歴史があり、また人々の娯楽として観光名所となる風景が数多くある。当館所蔵の有馬の絵葉書から絵葉書の題材となった風景を遺物・史料、交通、寺社、施設、街・風景、名所、山・川のテーマで分類すると次の表となる。当時注目されていた有馬の観光名所をみることができる。表1は当館所蔵の有馬の絵葉書から絵葉書の題材となった風景を遺物・史料、交通、寺社、施設、街・風景、名所、山・川のテーマで分類した表である。

表1 当館所蔵の「有馬」を題材とした絵葉書

テーマ	絵葉書の資料名称
遺物・史料	(高級二色 有馬名勝) 秀吉公袖石、(有馬名所) 有馬袂石、(有馬名勝) 鳥地獄、有馬名勝 虫地獄、(有馬名所) 天狗岩・虫地獄、摂津有馬天狗岩、国宝三体 毘沙門天王 吉祥天 地藏尊 兵庫県有馬郡長尾村多聞寺に安置す、有馬郡山口村特種物産 竹製品年産額三十二万円 藤製品年産額十二万円 寒天年、有馬温泉古図(二百二十年以前)
交通	神有電鉄有馬駅、(有馬名勝) 神有電鉄有馬駅、有馬名所 神有駅附近、(有馬名所) 神有駅附近
施設	有馬町高等温泉、(有馬名勝) 六甲ホテル附近、有馬兵衛川之別荘、有馬兵衛旅館内湯、有馬兵衛紅葉溪別荘、有馬名勝 湯の町本温泉、有馬ホテル、有馬名所 炭酸温泉場、(有馬名所) 炭酸温泉、摂津有馬炭酸温泉、(有馬名所) 炭酸温泉場、有馬温泉 湯の町、有馬温泉、摂津有馬本温泉、(有馬名所) 赤温泉浴場、摂津有馬ラジウム温泉、有馬だより(有馬名勝) 赤温泉浴場、摂津有馬停車場、(有馬名所) ラジウム温泉浴場
寺社	(有馬名勝) 瑞宝寺境内日暮の庭、(有馬名勝) 瑞宝寺境内、有馬瑞宝寺、有馬瑞宝寺、有馬名所 瑞宝寺境内の奇石豊公基盤の石・瑞宝寺、有馬名勝 瑞宝寺境内、(有馬名所) 瑞宝寺境内の奇石豊公基盤の石・瑞宝寺、摂津有馬瑞宝寺、摂津有馬瑞宝寺、(有馬名勝) 薬師寺本堂、(有馬名勝) 薬師寺本堂、有馬だより(有馬名勝) 温泉寺薬師堂、(有馬名所) 温泉寺薬師堂、摂津有馬薬師寺、摂津有馬薬師寺、(有馬名勝) 温泉神社、有馬名勝 温泉

	神社、(有馬名所)湯泉神社、(有馬名勝)金島城山妙見宮、(有馬名所)妙見堂・稲荷神社、摂津有馬妙見宮摂津有馬妙見宮
街・風景	(有馬名勝)有馬町全景、(有馬名所)全景、有馬全景、(有馬名所)街景、有馬兵衛紅葉溪別荘より眺めたる有馬全景、(有馬名所)聖天歓喜天の山上より有馬温泉を望む、(有馬名勝)有馬町湯の町、(有馬名勝)改造せる温泉街、摂津有馬入口、[有馬]、有馬名勝 有馬町全景、(有馬名勝)杖捨橋より妙見山の遠望、有馬郡山口村有馬富士の全景 戦国時代郷士山口五郎左へ門所領三千石を領せし城跡にて現今稲荷社稲倉魂命を祀る海拔三百八十五米、摂津有馬全景、摂津有馬七曲街道風景、有馬だより(有馬名勝)街景、泉郷”有馬”、[有馬]、摂津有馬落葉山より有馬富士の望遠、有馬だより(有馬名勝)蓬来峡、(有馬名勝)裏六甲の奇勝有馬口、六甲有馬ドライブウェイ
名所・名勝	(有馬名勝)夫婦瀧、有馬名勝 夫婦瀧、(有馬名勝)夫婦瀧、摂津有馬夫婦瀧、(有馬名所)夫婦瀧、(有馬名所)鼓ヶ瀧、有馬鼓ヶ瀧、摂津有馬鼓ヶ瀧、摂津有馬鼓ヶ瀧、(有馬名勝)霊泉、有馬名勝 霊泉、(有馬名所)有馬炭酸水湧出場、有馬名勝 霊泉、摂津有馬炭酸湧出場、(有馬名所)天然炭酸泉湧出場、(有馬名勝)栄砒泉、(有馬名勝)栄砒泉、(有馬名所)杖捨橋、有馬名所 杖捨橋

④温泉起源略起(No. 46-7)

図 4・5の絵葉書には温泉街を訪れる観光客と思われる人々がみられ、説明文には次のように書かれている。

温泉起源畧記 有馬温泉は遠く時代の昔にあり帝の行幸と共に古今地名の士の常温泉を選び以て其名天下に高し土地高燥にして四面麗山を廻し眺望絶佳四季共に都人士の浴客絶ず今また三層樓の新装なり

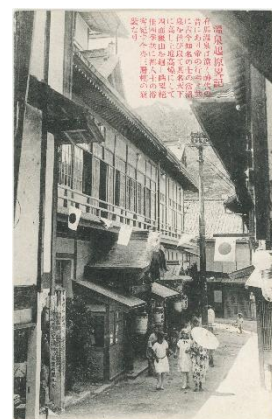
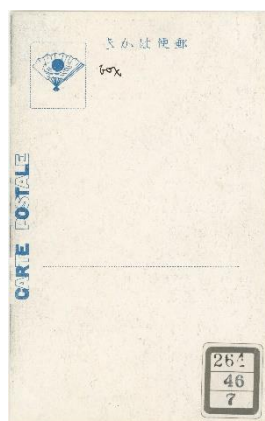


図 4 温泉起源略起(表) 図 5 温泉起源略起(裏)

有馬温泉の魅力をその歴史とともに宣伝し、観光客を増やすねらいがあったと思われる。当館所蔵の有馬温泉の絵葉書は複数枚セットになっているものが多く、4枚から23枚セットなどさまざまであり、すべて揃っていないものも多い。絵葉書の製作時期は正確にはわからないものが多いが、おそらく昭和戦前と思われる。発行者は有馬温泉内湯兵衛旅館、神戸新名所選定委員会、神戸市経済局観光課、神戸史談会出版部、不明などである。

表 2 は当館所蔵の絵葉書の資料名称から、同じ被写体を集計した表である。枚数の多い被写体には瑞宝寺の庭、有馬全景、有馬炭酸水湧出場(霊泉)、赤湯温泉場、夫婦瀧、鼓ヶ瀧などの観光名所が見られる。これらの観光名所は 1769(明和六)年に河上維姜が選んだ和歌に円満院門跡が絵を描いた『有馬六景』の影響が大きいと言えよう。「有馬六景」とは鼓ヶ瀧の松嵐、落葉山の夕照、温泉寺の晩鐘、功池山の秋月、有馬富士の暮雪、有明桜の春望のことである¹¹⁾。

表 2 当館所蔵の有馬温泉絵葉書の同じ被写体の集計表

被写体	資料名称【シリーズ No.】	枚数
瑞宝寺境内日暮の庭	(有馬名勝)瑞宝寺境内日暮の庭【8】、(有馬名勝)瑞宝寺境内【9】、有馬瑞宝寺【46】、有馬瑞宝寺【46】、有馬名勝 瑞宝寺境内 【70】、有馬名所 瑞宝寺境内の奇石豊公基盤の石・瑞宝寺【147】、摂津有馬瑞宝寺【260】、摂津有馬瑞宝寺【261】、(有馬名所)瑞宝寺境内の奇岩豊公基盤の石・瑞宝寺【305】	9
有馬全景	(有馬名勝)有馬町全景【6】有馬兵衛紅葉溪別荘より眺めたる有馬全景【10】、有馬全景【46】、有馬名勝 有馬町全景【70】、有馬郡山口村有馬富士の全景 戦国時代郷士山口五郎左へ門所領三千石を領せじ城跡にて現今稻荷社稻倉魂命を祀る海拔三百八十五米【220】、摂津有馬全景【260】、(有馬名所)全景【306】、有馬だより(有馬名勝)街景【316】	8
有馬炭酸水湧出場(霊泉)	[霊泉]【8】、(有馬名勝)霊泉【9】、(有馬名所)有馬炭酸水湧出場【46】、有馬名勝 霊泉【70】、有馬名所 炭酸温泉場【147】有馬名勝 霊泉【212】、(有馬名所)有馬炭酸水湧出場【46】、有馬炭酸水湧出場(霊泉)炭酸水【206】	7
赤湯温泉場	(有馬名所)赤湯温泉場【305】、有馬だより(有馬名勝)赤温泉浴場【316】、有馬町高等温泉【8】、(有馬名勝)有馬町湯の町【8】、有馬名勝 湯の町本温泉【70】、有馬温泉 湯の町【186】	6
夫婦瀧	(有馬名勝)夫婦瀧【8】、(有馬名勝)夫婦瀧【9】、有馬名勝 夫婦瀧【70】、摂津有馬夫婦瀧【290】、(有馬名所)夫婦瀧【305】	5
鼓ヶ瀧	有馬鼓ヶ瀧【8】、摂津有馬鼓ヶ瀧【260】、摂津有馬鼓ヶ瀧【261】、(有馬名所)鼓ヶ瀧【305】、	4

⑤瑞宝寺境内日暮の庭(No.8-8)

当館所蔵の絵葉書の中で、同じ観光名所を対象とした絵葉書のうち特に枚数の多いものが、「瑞宝寺境内日暮の庭」(図6)である。絵葉書には「(有馬名勝)瑞寶寺境内日暮の庭 Arima Meisho.」と説明文が書かれている。「瑞宝寺境内日暮の庭」は太閤秀吉がその庭の眺めを「いくら眺めていても飽きない」と褒めたたえたといわれる風景で、古くから有馬温泉を代表する名所である。毎年秋になると紅葉の下で秀吉を偲ぶ野点が行われる。



図6 瑞宝寺境内日暮の庭

⑥有馬全景(No.8-6)

図7の絵葉書には「(有馬名勝)有馬町全景 Arima Meisho.」と説明が書かれている。山間にある有馬温泉を一望したもので、当時の様子がうかがえる。有馬温泉は狭い範囲にさまざまな温泉

が楽しめるという、他の温泉地にはみられない特徴がある¹²⁾。



図 7 (有馬名勝) 有馬全景



図 8 (有馬名勝) 霊

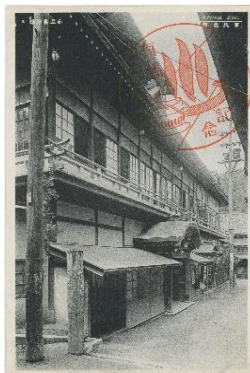


図 9 赤湯温泉場

⑦ (有馬名勝) 霊泉 (No.9-6)

図 8 は写真の説明文に「Arima Leisen (有馬名勝) 霊泉」と書かれている。1886 (明治 19) 年、炭酸泉を雨水から守るため地元有志により上屋が建てられ、翌年には、炭酸泉浴場が設けられた。炭酸泉浴場は、1923 (大正 12) 年、当時の有馬町が民間に賃貸し、三階建てになり、1970 (昭和 45) 年まで続いた。また、サイダー製造のため、1900 (明治 33) 年に有馬鉱泉合資会社が設立された¹³⁾。

⑧ 赤湯温泉場 (No.8-6)

図 9 は、「Arima Spa 有馬名所 赤湯温泉浴場」と書かれ、温泉マークのある有馬記念というスタンプが押されている。同じ被写体の絵葉書の説明文には「高等温泉」「湯の町」「本温泉」と書かれたものもある。

江戸時代から続いている共同浴場は 1883 (明治 16) 年にオランダ人クレーツ氏の設計により「洋館二階建て」で建築されたが、傾くなどがあり 1894 年に元の「宮殿づくり平屋建て」に改装された。その後、1961 (昭和 36) 年 4 月鉄筋コンクリート造りに改築し、神戸市立有馬温泉会館となった。現在外湯は「金の湯」「銀の湯」のみ存在している¹⁴⁾。

⑨ 夫婦瀧 (No.8-2)

図 10 の説明文には「(有馬名勝) 夫婦瀧 Arima Meisho.」と書かれている。夫婦瀧は六甲ケーブル乗り場方面にある鼓ヶ瀧の上方に位置し、寄り添う夫婦のような美しい瀧である。夫婦瀧を見るには舗装されたルートがなく、気軽に見に行くことは難しい。



図 10 夫婦瀧



図 11 鼓ヶ瀧

⑩ 鼓ヶ瀧 (No.8-5)

図 11 の説明文には「有馬 鼓ヶ瀧 Tsutsumigataki」と書かれている。瀧の音が

鼓を打つ音に似ていたことからその名がついたといわれている。現在は岩の配置が変わり、その音は聞くことはできないが力強い水音を響かせている。

(2) 有馬の鉄道と自動車運送事業の発達

①神有鉄道有馬駅(No.8-7)

図12は神有鉄道有馬駅である。の右下に「神有電鐵有馬驛」、その下に「Shinyu Arima eki」と英字表記されている。1928(昭和3)年11月、神有鉄道の湊川―有馬間が開業され、運転が開始された。所要時間はおよそ50分で、有馬温泉に行くのが非常に便利になった。

②六甲有馬ドライブウェイ(No.185-6)

1928(昭和3)年に、裏六甲ドライブウェイ、翌年には、表六甲ドライブウェイが開通し、市街地から記念碑台を經由して有馬温泉に行くことができる自動車道が完成した。1938年の「阪神大水害」で被害を受けるまで運行された¹⁵⁾。

表六甲ドライブウェイは1953(昭和28)年に公共事業としての着工したものの、財源に余裕がなく、建設資金がつかない事態となった。有料道路に変更すれば市債の起債が可能になることから、表六甲ドライブウェイは有料道路として再建されることになった。有料道路の収益が裏六甲ドライブウェイ、六甲山トンネル、山麓バイパスと、次々と有料道路を建設していくことに活用された¹⁶⁾。

③改造セル温泉街(No.9-2)

温泉街にずらりと並んだ自動車が印象的な絵葉書(図14)には「Arima Meisho.(有馬名勝)改造セル温泉街」と説明が付されている。有馬温泉に自動車を利用して訪れる観光客が増加したことがわかる。

1905(明治38)年7月、有馬自動車株式会社が有馬温泉と阪鶴鉄道三田駅との間の運転を開始したが、シーズンオフには乗客がなくなるなど、一年足らずで運行が終わってしまった。1913(大正2)年、「有馬―三田」間の乗合自動車が運行されたが、収支が償わず約一年後に運行を止めている。翌年9月、宝塚―名塩間のバスを、山口經由で有馬温泉へと路線を延長した。同年、平野から有馬街道を通って有馬温泉まで、乗合自動車の営業を始めた。しかし、道路事情や有馬温泉の開散期の減収など諸般の事情により営業は順調にはいかなかった¹⁷⁾。

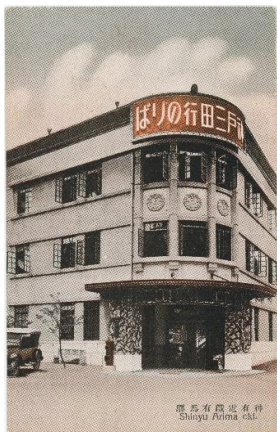


図12 神有電鐵有馬駅

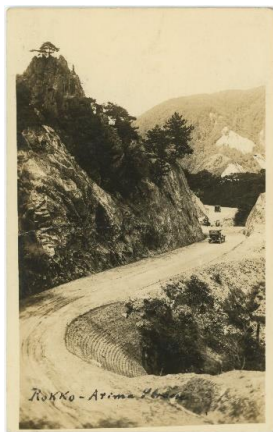


図13 六甲有馬ドライブウェイ



図14 改造セル温泉街

(3) 神戸市の観光事業の発展と有馬温泉

⑭[神戸風景]有馬全景(No.210-7)

図15は神戸市経済局観光課が発行した神戸市の絵葉書綴の表紙である。絵葉書はキリトリ線入りで、一枚ずつ切り離して使用することができる。表紙の布引の瀧の絵は小松益喜の作品である。小松益喜(1904-2002)は高知市に生まれ、東京美術学校を卒業後、郷里の高知に戻る。再び上京を決心し、神戸に立ち寄った小松は、神戸の街並や異人館に魅せられ、そのまま神戸に住み制作を続けることになった¹⁸⁾。

絵葉書の右下には神戸市経済局観光課と書かれており、七枚綴りになっている。表紙も絵葉書として使用することができる。裏面(図16)には各絵葉書の説明文が記載され、図17の有馬全景について次のように書かれている。

有馬温泉(神戸電鉄有馬駅下車)

裏六甲の峽間に、千古の霊泉をたたえて、古くからその名をうたわれた湯の町有馬は、100度という高温の温泉が豊富に湧き出て、湯けむりの間に広重えがく浮世絵のように周囲の連峰がくっきりと繊細な線で浮かび、溪流のせせらぎにも泉郷の自然美が躍動しています。(写真は落ち葉山から)

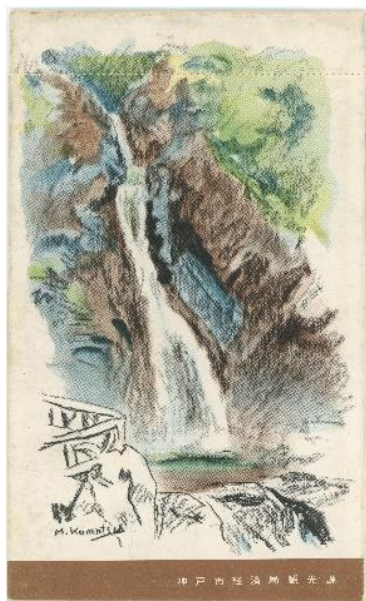


図15[神戸風景]



図16 説明文

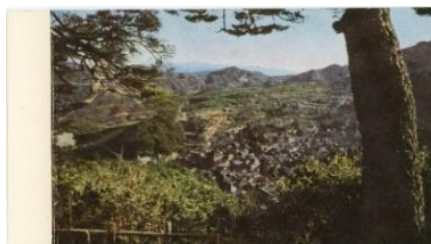


図17 有馬全景

おわりに

戦後神戸市の観光行政の復活は早く、1949(昭和24)年には、経済局貿易観光課となり、翌年には、貿易課と観光課に分離され、「観光」は、経済政策のなかでも重要な役割を担うことになっていった¹⁹⁾。「有馬」の絵葉書は被写体から、当時の人々の興味関心を集めた有馬の名所・名勝、温泉、近代的な施設、新しい交通手段といった風景を知ることができる。その被写体を通して、観光地へと変化を遂げた近現代の有馬の姿と交通の発達をみることができる。絵葉書は手に取った人が訪れたいような「広告」の役割を果たしていたといえよう。

注

- 1) 風早恂編著『有馬温泉史料 上巻』有馬温泉史料刊行委員会、1981年
- 2) 神戸市 HP <https://www.city.kobe.lg.jp/kuyakusho/hokushin/shokai/arima.html>
- 3) 田中芳男著『校訂有馬温泉誌 全』松岡儀兵衛、1894年
- 4) 小沢清躬著『有馬温泉史話』五典書院、1938年
- 5) 新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史生活文化編』第二章第三節「有馬温泉の発展と課題」神戸市、2020年
- 6) 同前
- 7) 1948年有馬町が神戸市に合併されるとともに、有馬温泉の開発が行われた。
- 8) 注5に同じ
- 9) 同前
- 10) 本多静六講話『森林公園ト有馬温泉風景利用策 大正五年十一月十四日有馬町役場ニ於テ』有馬町役場、1916年
- 11) 有馬郡編『有馬郡誌 上』有馬郡誌編纂管理者、1929年。同書によると「有馬六景」は「鼓瀑松嵐、落葉山夕照、温泉寺晚鐘、功池山秋月、有馬富士暮雪、有明桜春望」である。
- 12) 注5に同じ
- 13) 同前
- 14) 同前
- 15) 同前
- 16) 新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史 行政編Ⅲ 都市の整備』神戸市、2005年
- 17) 注5に同じ
- 18) 小松益喜『小松益喜（絵画）展－神戸・居留地・異人館』朝日新聞社、1986年
- 19) 注5に同じ

神戸市史紀要「神戸の歴史」第三十号

二〇二五(令和七)年七月二十五日発行

編集発行者 神戸市行財政局総務課文書館

〒六五一〇〇五六 神戸市中央区熊内町一―八―二一

電話 (〇七八)二三二―三四三七

FAX (〇七八)二三二―三八四〇

MAIL bunsyokan@city.kobe.lg.jp